

ソードアート・オンライン～黒の剣士と紅の最強プレイヤー～

麒麟@

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

彼は過去のことを謝りたい一心で上京した。ありえもしない再開を果たして彼はある事件に巻き込まれる。彼女が取る行動とは？

その行動が覚める道は？

一体何があるんだろう

目次

15話	14話	13話	12話	11話	10話	9話	8話	7話	6話	5話	4話	3話	2話	第1話
97	90	86	80	74	69	61	54	46	35	28	22	16	7	1

第1話

小さい頃よく遊んでいた子がいた。その子はよく笑って一緒に遊んでいた。けれどあることをきっかけに会うことはなくなり、俺は親に聞いたが教えてはくれない。

俺にも1人の妹がいる。3つ離れた沙耶香さやかという名前の妹だ。

「お兄ちゃんまたゲーム?」

「うるさいなあ」

「詩乃さんのことまだ引きずってるの?」

「っ!」

「危な」

俺はその名前を出されてついカッとなりものを投げてしまった。中学に入って今は3年だ。それであの時のいろんな情報をかき集めてその時のことを調べた。俺は当時のことがわかった。同時に俺は俺が許せなかった。何故そんなにも辛い時に助けてやれなかったんだろう。

「詩乃さんのこと好きだったの?」

「そんなんじゃないよ。ただ助けてやれない不甲斐なさを許せないだけだよ」

「そういうのは偽善だよ。結局何も手助けできてない」

「そうなんだ」

「もう出て行けよ」

「わかったよ」

沙耶香は出て行き俺は前々から進めていたことをする。毎日秘密でしていた新聞配り。本来なら雇ってはくれないがこの辺りなら雇ってくれた。そして俺は集めた情報をもとに志願書を出しに行った。うちの親は俺には興味はない。沙耶香はなんでもできるし勉強

もできる。俺には何もなかったから気に入られることもない。

唯一ゲームだけは得意だった。それで優勝した賞金なんかもある。夜になり俺は両親に話だけしようと思いき食卓に並んだ。基本俺はこの家で同じ時間帯に飯を食うことを許されていない。

沙耶香の才能が目覚めるまでは一緒に食べていたと思う。

「何故お前がいる?」

「今日は話がある」

「何かしら?」

「俺高校東京のどこ行くから」

「そうか」

「勝手になさい」

「それじゃあ」

本当に俺はこの家ではお荷物なんだなとひしひしと思う。俺は飯は食べないで部屋に戻る。こんな俺でも一応部屋はあるんだからまだマシだと思う。

ちなみに飯はどうしてるのかって?俺はあんまり食べてない。どうしても腹減った時は仕方なくお金を出して食うか家の残りを食べる。

少しすると部屋のドアが鳴って入ってきたのは沙耶香だ。

「どうした?」

「東京行くなんて聞いてないよ」

「そりゃさつき言ったからな」

「なんで?」

「お前は嬉しいだろ。厄介者がいなくなるんだから。それにこれからは彼氏も呼べるんだぞ」

「わかったよ」

沙耶香は出て行き俺は1人になった。けれどその時に見た沙耶香

の顔が忘れられないまま入試の日が来た。

お兄ちゃんが東京行ってくつて聞いて驚いた。てつきりこつちで受験するものと思っていたから。それにお兄ちゃんには意地で彼氏がいるって言ったけどそれは嘘だ。私が好きなのはお兄ちゃんだから。

気持ち悪いっていう人もいると思うけど私自身この気持ちは収まりそうにない。

「はあ、私も向こうに受験しに行こうかな」

誰にも聞こえない独り言を呟いてみたが誰も聞いていない。それに万が一受けに行くとしてもお兄ちゃんが受けた高校を知るすべがない。どうしよう。今の私が聞いても教えてくれるわけがないし、私知ってるお兄ちゃんのアカウントって言えば連絡用のアプリのやつしか知らない。

こんな時になると思ってしまう。私がつとお兄ちゃんに寄り添っていたならいろんなことを教えてくれていたかもしれない。私は結局何もいい案が出ないまま眠った。

受験の1週間前から次の家に滞在していた。古いマンションだが特に文句はない。パソコンも繋げるしLAMケーブルもちゃんとあるから問題という問題がない。本来なら近所に挨拶行くところだけど隣だけにしようと思ってお菓子を持って家を出る。

「失礼します。隣に引越してきたんですけど」

「あ、はい。今行きます」

インターホンでやりとりをしてその人の部屋は静かに開かれていった。そして

「し……の?」

「え?えつとまさか紫雲^{しゅうん}?」

「うそだろ」

「なんでこつちにいるの?」

「一言お前に謝りたくてな。あの時助けてやれなくて済まなかった」

「くくく放っておいて!口にも出さないで!」

「わかった。これ渡しとくよ。それじゃあ」

これ以上刺激するのは良くないと思い渡して俺は家に帰る。その間ずつと背中に視線を感じていたが俺は振り返ることなく家に入る。そしてβテスト版が当たっているか気になり調べると当たっている1ヶ月後ぐらいには届くそうさ。

競争率は何倍だったんだろうな。まさか当たるとは思っておらず心底喜んだ。

そのまま届くまでの学校生活を楽しむ。詩乃と同じ学校だったた

め行き道に会うこともたまにあった。

そしてβテスターとしてのものが届く1週間前
家を出ると詩乃がそこにいた。今までなかったからなに事かと思
う。

「どうしたこんなところで」

「一緒に学校行こうと思っただけよ」

「そう。それじゃあ行くか」

「ええ」

そこからは2人並んで歩き出す。けれど2人とも気まずいのを察
知して何も話さない。少し歩いていくと後ろから声が出た。

「朝田さんそいつ誰？」

「幼なじみの紫雲」

「どうも」

「なんでそんな奴に？」

「なんでって家が隣だからだよ」

「なんでなんでなんでなんでなんで」

小声でぶつぶつ言っていて聞いていてムカつく。あんまりにもイ
ライラしてきたので俺は目の前の地面を思いっきり踏む。その音に
びびったのか腰を抜かしている。

まあ確かにあんなに音が出るとも思ってたし、ものすんごい
足が痛い。とつても。

その間何も話さなくなった。まあ雰囲気も悪いしこの間のことを
悩んでいるのかもしれない。

「あ、そうだ詩乃。俺SAOのβテスター当たったんだよ」

「何それ？」

「新しいゲームだよ。楽しみなんだなあ」

「ふふ、相変わらずね。楽しいことを話す時こつちまで嬉しくなるわ」
「そっか」

この時はまだ感じていもなかった。あんなことに巻き込まれて俺の人生変わっていくなんて。

2話

やっとその日がやってきた。SAOBテスターとして潜る。

「リンクスタート」

そして目の前にいろんな景色が出てきて名前を決めるところだった。俺はどんなゲームでもこの名前でやってきたのでそれを入れる。そしていざ降りてみるとゲームとは思えなかった。今までもたくさんのゲームをしてきたつもりだったけどこれは格が違う。

しばらく進んでいると街が見えてくる。入りいろんなところ見て回るがやっぱりゲームとは思えない。武器屋に行き買おうとするがほぼ所持金がチュートリアル通りなので買えずに見ていた。

俺の武器は短剣だ。片手剣でも良かったがなんとなく短剣の方が良かった。

「あなたも短剣なの？」

「あんたは？」

「私の名前はコハル。よろしくね」

「ムラクモ」

「へえうつてええ!?今なんて」

「だからムラクモだって」

「うそ!あのムラクモ?数あるゲームでソロ一位をキープし続けたその世界で知らない人はいないっていう」

「うーん多分人違いじゃない?」

「そんなあー」

人違いなんかじゃない。確かにいろんなゲームで一位を取り続けたこともあるけどそんなふうに言われていたのは知らなかったけど。そしてなんか流れで同じパーティーを組むことになった。

「それで武器は？」

「これ。曲刃の短剣」

「ほーまた難しいのを」

「難しいの？」

「まあな」

そこから街から出てフィールドに行く。筋は悪くないがなかなか難しい。それにこのゲームでは自分の体を動かしているようでまた感覚が違う。だからこそその感覚の違いを早く見つけないといつまでもできない。

「難しいー」

「見てろ」

俺は短剣を構えてラピッドパイトを放つ。すると当たりイノシシはポリゴンになって消えていく。

「すごい。どうやったの？やり方教えて」

「とりあえずちゃんと構えて敵にビビるな。今はまだ足がすくんでいる状態だからうまくいかない。ちゃんと構えたらちゃんと体が勝手に動く」

「う、うん」

そこから何度かやるとうまくいった。ぴよんぴよん跳ねて喜んでいる。そこから俺たちは2人でレベリングすることになった。俺たちはレベル11まで飛ばしてあげて行った。もう会うこともないだろうから利用させてもらうつもりが利用されていたようにも見える。

「んじや今日はこれまでだな」

「お疲れ様。ありがとう。すごい助かったよ」

「それじゃあ」

「明日も一緒にできないかな？」

「やめとけ。これ以上俺に関わるのは」

「明日も街で待つてるから！」

「人の話を聞け！」

ログアウトして行ったので俺のことは聞いてないだろう。全くなんて奴だ。自由奔放で勝手というかなんというか。

俺はそこからログアウトして軽くカップラーメンを食べてもう一度入る。

その日はまたレベリングを続けながらいいポイントを探す。

まだ見つからず結局12時を回りそうだったので俺はログアウトした。レベルも16まで上がりなんとかなりそうだ。

第1層のフロアボスに挑めるか分からないがまだきついと思う。20まで上がったら一度行ってみるつもりだ。

現実に戻り軽くシャワーを浴びてすぐに寝る。結局学校というのがある以上一定以上はできない。まあそれはほとんどの人間がそうなので極端に飛び抜ける奴もいないと思うが……

考えているとあつという間に眠たくなってきてすぐに眠った。

朝起きていつもどおり学校にいき、裏でジュースを買っていくと近くから声がする。なんの声がよく聞こえないので近くに行く。

「朝田さーなんで村田に近づいてんの？私の忠告無視するわけ？」

「そんなんじゃ」

「ふざけてると痛い目見るよ」

「だからわたしはー！」

見てられない。というかなんで俺のことでこんなにも喧嘩になってるんだらう。さっぱりだ？

「おいそこまでにしとけよ。お前らこそ痛い目見るぞ」

「村田!?!なんでここか?」

「お前らが俺のことで言い合ってる理由は聞かない。けどな今後詩乃にちよつかいかけてみろこうなるからな」

俺は近くにあった気を殴り枝を折る。そして目の前で枝を握りつぶした。すると驚いたのか逃げるようにこの場を去っていった。

「ちよつと紫雲なんで!？」

「なんでつて? 例えば目の前に困ってる人がいて助けるのを拒むか?

例え詩乃が拒んでも俺は手を伸ばしたいんだよ」

「ばっかじゃないの!!」

詩乃はそう言つてどっかに走つて行つてしまった。なんだか悪いことでもしたのかなと思つてしまったがそのまま教室に行つて用意する。

そこから詩乃は顔も合わしてくれない。まあいいんだけど。

あのバカなんであんなことを言うのよ。昔と何も変わってない。ほんとに。嬉しい反面恥ずかしい。

初めて会つた時も嬉しくて涙が出そうになった。人殺しをしたわたしはもう会えないとさえ思っていた。

だからこそあの時の行動は想定を超えていて驚いた。学校が終わる家に帰つてからも体の熱が引かなかった。

「本当にバカなんだから」

わたしはベッドに体をうずめて眠った。

「リンクスタート」

入っていくと昨日のことが頭に浮かんだ。まさかいるとは思わな
いが一応。一応見に行くことにする。

町に入って見にいくと時計台の下にいた。全くあいつなんできると
思ってたんだらう。

「あー遅いよ。今日もよろしくね」

「一個だけ聞いてもいいか？なんで待ってたんだ？俺が来ないことも
あったかもしれないだろ」

「なんでって当たり前だよ。昨日一日一緒に行動してたらわかるよ」

「は、はあ？」

「だって昨日も私がソードスキルできなくても根気強く教えてくれ
た。レベリングにも手伝ってくれた。信頼するのには十分じゃない
？」

「お前いつか人に騙されるぞ」

「そうかなあー」

「そうだよ」

俺たちは街を出て少しレベリングをする。俺は17、コハルは14まで上がった。足して30以上になった。これならいけるかと思いを切り出した。

「明日も一緒にできるのか？」

「う、うんできるけど」

「明日第1層ボスに挑もうと思ってる。やってみるか？」

「ええ!?勝てるの？」

「やってみる。勝てるかわからないけどな」

「わかったよとりあえずやってみよう」

「明日も今日と同じ時間に集合で今日はまだ行けそう？」

「大丈夫」

「それなら今日で迷宮区のマッピングを終わらせよう」

「マッピング？」

「おいおいまさかマッピング知らないのか？」

「うん」

「マッピングっていうのは地図を出すことだよ。この仮想世界では書く必要がないから要するに記録だな」

「はあへえほおー。それがなんの役に？」

「お前なあー基本的に地図を出してたらすぐにボス部屋までいけるだろ」

「あ、なるほどね」

そこからもいろんな説明してから俺たちは迷宮区にきた。迷宮区でも思ったほど敵の強さは強くない。なんとなく地図をマッピングしていく。ボス部屋の前に着く。流石に威圧感があって今の俺たちでクリアできるか分からない。

ボスの武器ぐらい覗いておいてもいいかもしれない。俺はコハルに待っておくように伝えて中に入る。

ボスの名前はイルファンングザコボルトロード。武器は斧と盾を

持っている。けど腰の後ろにタルワールを持っているからいつからか持ち替える考えた方がいいだろう。

「グヴオオオオオオオオオオ」

「うるさ」

そこから俺はラピッドパイトを放つ。これは効いているとみるべきなのか。その後は攻撃続けるがなかなかHPが減らない。代わりに俺のHPはどんどん減っていく。

すぐさまポーションをズボンのポケットに入れていつでも飲めるようにしておく。ダメージを受けて次々に飲んでいくがそれでもまだ足りない。今回は負けかな。

「ムラクモ」

素晴らしい扉から入ってきたのはコハルだった。お前外で待つてろって言っただろうが。コハルは回復結晶を使った。

それは貴重だから置いておけって言ったのに。今はまだなかなか手に入るものでもないんだから。

俺のHPは回復してそこからは2人で削っていく。途中でタルワールに持ち替えた。それでもなんとか削ることができて最後の一発ぐらいになった。

「ムラクモ決めて！」

「ああー！」

俺はタルワールの横振りに短剣を当てて受け流して大剣の上を滑っていき、そのまま受け流して首に目掛けてクロスエッジを放った。するとポリゴン状になって消えた。

2人ともよほど疲れたのか地面に寝そべってしばらく動けそうにない。

「ハハ、あははははははははは」

「やったな」

「うん、やったね。わたし達一層目のボスをクリアしたんだよ」

明日クリアするつもりが結局今日クリアすることになってしまった。俺のレベルも一気に上がり20になった。

先にコハルが立ち上がって俺は肩を貸してもらい2層に上がった。そこは一面草原で大変なことになりそうだなと思いつつ俺たちはアクティベートを終わらせてログアウトした。

それから俺とコハルはよくパーティを組むことになり結局俺たちはβテストでは15層までしか行けずそれ以上行つたプレイヤーはいないそうだ。現時点では俺たちが最高ということになった。

「今日までありがとう。また正式サービス始まつたら一緒にパーティ組まない?」

「気が向いたらな」

「ふふ」

「何笑つてんだよ」

「だってムラクモがそういう時つて大概組んでくれるんだもん」

「そんなこと」

「ない、じゃなくてもわかってるよ。だってソードスキルすらできなかったわたしを諦めずに見てくれてたからね」

「それはお前がしつこかったからだろ」

「そうだったっけ?」

「そうだよ!」

「でも助けてくれたよ。そういうわけでサービス始まつてからもよろしくね」

「あ、おいこら!」

ログアウトして逃げた。あのやろう本当に人の話を聞かないな。

まあここまでパーティを組んだんだし別に組むことに抵抗はないんだけど。

それにしても俺たちとほとんど変わらずソロできた奴がいるとか
なんかか。そいつには会ったことはないが全身真っ黒の装備らしい。

俺は全身真っ赤だから人のこと言えない。

そしてとうとう正式サービスの日がやってきた。

3話

正式サービス初日

俺はフィールドに出てレベリングをする。βテスターとしての知識は残っているためレベルが8まで上がっていく。そして夕方ぐらいいなくなっていく。鐘の音になる。こんな鐘今までなくてなかったのに。

俺の体がどんどん消えていく。なんだこれ。こんなにあつたか？そして目の前が消えて俺は広場にいた。周りを見渡すと他にもこうなっている奴らがいるみたいだ。

というか今この広場にいる奴らほぼログインしている奴ら全員いるんじゃないか？

「あ、ムラクモだ〜」

「げえ！コハル」

「久しぶり〜これ何か知ってる？」

「知らん、知るわけがないだろう」

少しすると空がだんだん赤くなっていく。少しして巨大な魔導師が空に映る。

「プレイヤー諸君、私の世界へようこそ。」

「は？」

わたしの世界ってなんだ。こいつは一体？

「私の名前は茅場昌彦。今やこの世界をコントロール出来る唯一の人間だ」

「どういうこと？」

「待て。少し話を聞かせてくれ。最後まで」
「うん」

「プレイヤー諸君はメニューからログアウトボタンが消滅している事に気づいてると思う。しかしこれはゲームの不具合ではない。繰り返し。不具合ではなく、ソードアート・オンライン本来の仕様である」

待て待てどういうことだ？ログアウトできない？

俺はすぐにメニュー画面を開く。だが今こいつが言った通りログアウトがない。

「諸君は自発的にログアウトする事は出来ない。また、外部の人間によるナーブギアの停止、あるいは解除もありえない。もしそれが試みられた場合、ナーブギアの信号素子が発する高出力マイクロウェーブが諸君の脳を破壊し、生命活動を停止させる」

「死ぬなんて嘘だよねムラクモ？」

「いや事実だろう。そうじゃないとログアウトを消した理由にもならない」

コハルは動揺も隠せていない。周りはもつとひどく阿鼻叫喚という感じだ。

俺は死ぬなんていつもある感覚だったからそこまでではないが人間死ぬとわかるとこうなるのが普通だろう。

「残念ながら、現時点でプレイヤーの家族及び友人が警告を無視して、ナーブギアを強制的に解除しようとした例が少なからずある。その結果、213名のプレイヤーがアイングラッド及び現実世界からも永久退場している」

「うそだよ……ね」

「いやこれも事実だろう。家族や友人がやるというのもわかる」

それにしてもすでに213人か。これ以上増えることはないとは思いますが想像以上に減っている。

これは本当かどうかはわからない。事実は現実世界での出来事なんだ。

「ご覧の通り、多数の死者が出た事を含め、この状況をあらゆるメディアが報道している。よってすでに強制的にナーブギアを解除される危険は低くなつてると言つていいだろう。諸君らは安心してゲーム攻略に励んで欲しい。しかし、十分に留意してもらいたい。今後ゲームにおいてあらゆる蘇生手段は機能しない。HPがゼロになった瞬間、諸君らのアバターは永久に消滅し、同時に、君達の脳をナーブギアが破壊する」

「うそ、いやだいやだよムラクモ」

「慌てんな。これでやることは決まった。あとは最後まで話聞いとけ」

「う、うん」

「諸君らが解放される条件はただ一つ、このゲームをクリアすればいい。現在君がいるのはアイングラッドの最下層、第1層である。各フロアの迷宮区を攻略し、フロアボスを倒せば上に進める。第100層にいる最終ボスを倒せばクリアだ」

おいおい待てよ。俺たちが一番進んだのも15層だぞ。その数倍だと。今の現状では無理な数字だ。

「それでは最後に、諸君のアイテムストレージに私からのプレゼントを用意してある。確認してくれたまえ」

ストレージを見てみると確かに入っていた。全員が使っていく中で俺も使う。すると本当の姿が映り始めてアバターは本来の姿に戻る。

「もしかしてムラクモ？」

「コハルか？」

コハルの身長は少し伸びて目の色は変わり髪長さも変わっていた。

俺も見てみると髪の長さや身長がリアルとほぼ同じだった。

「諸君は今、何故、と思っっているだろうか？何故ソードアート・オンライン及びナーブギアの開発者、茅場昌彦は何でこんなことをしたのかと。私の目的は既に達せられている。この世界を作り出し、干渉するためにのみ、私はソードアート・オンラインを作った。

そして今、全ては達成せしめられた。以上でソードアート・オンライン正式サービスのチュートリアルを終了する。プレイヤー諸君の健闘を祈る」

「目的は既に達せられている？それにこれがチュートリアルだと？」

そんなことを呟いているうちに魔導師は消えていった。

そんなことより俺は約2日でクリアしないと体がもたない。ほとんどのやつは家族なんかになにかしらの方法で病院に連れていくだろうが俺は一人暮らしでそうもいかない。

けれど2日なんて正直無理だ。俺たちが15層まで上がったのもほとんど1ヶ月かかったし俺は死ぬのが前提だな。

「どうしようムラクモ」

「いいからこっちこい」

俺はコハルの手を引き広場から出ていく。広場は今も阿鼻叫喚だ。悪いが俺もそこまでお人好しじゃないので全員助けるのも無理だ。

町の片隅に移動して俺は提案した。

「コハル今すぐ街を出るぞ」

「なんで？」

「この街周辺はすぐに狩場を失う。ということはレベリングをできる可能性は極めて低い。ならすぐにでも次の街に移動するべきだ」

「けど……みんなは？」

「コハルひとつだけ言っておく。全員を助けたいっていうお前の気持ちは確かにいいと思うがそんな甘い考え俺とパーティを組むなら捨てろ」

「でも……でも」

「ならここまでだ。じゃあな。死ぬなよ」

俺はコハルを見捨てて始まりの街から出ていく。すでに死と隣り合わせだからか多少の危険はやむ負えない。早く一層をクリアしないといけない。そして全員に希望を持たせて2日、長くても3日以内にはクリアしないと俺が死ぬ。

走って行き俺は出てくる敵をソードスキルで倒していく。始まりの町の付近は弱いからすでにレベル8の俺にはそこまでじゃない。次の街につき俺はクエストをクリアしていく。その合間にレベリングも兼ねて12になったが辺りはすでに真っ暗だ。

みんなは一応宿に行っているだろうけど俺にそんな時間はないので迷宮区に向かう。

迷宮区の中はそこまで変わっておらず俺はどんどん進んでいく。一応回復薬の確認して途中で休憩しながらだが。

そしてボス部屋の前につき体力を満タンしてから中に入る。相変わらずでかいが今回は前とは違うようで周りに子分みたいなのがいる。

あれがいると厄介だな。どうしようかなと思っているとすでにこつちに向かってくる。

俺はかわしつつ攻撃していくが結局ボスにはほとんどダメージが通っていない。

やばいな。俺このまま死ぬかも。いや死ぬのもともとわかってた。この部屋に入った時から。βテストの時とは違う圧力。こ

れが死と隣り合わせということなんだということが分かってからはうまく動けない。そして俺はボスの一撃をもろに喰らい体力を見てもみるともう一割もない。もう死んだなと思って目を瞑った。

「ムラクモ掴まって！」

「はっ？」

俺は手を伸ばすとその手は掴まれてリニア―逆に放って距離を取った。

「転移始まりの街」

俺とコハルは転移して始まりの街に帰ってきていた。

4話

「グヘエ！」

「キヤア！」

俺たちは走りながら転移したからそのままの勢いでこけて着いた。そして今の現状が理解できない俺を放ってコハルは口を開き始めた。

「なんでそんなにも無茶するの？」

「なんでって」

「無理しすぎだよ。いくらなんでも。1人でボスなんて勝てないに決まってるよ」

「なんでだ？勝てるかもしれないだろ」

「ムラクモがなんでそんなこともわからないの？あれβの時と違ってたよ。周りに子分もいたしあの時よりもレベルが低いのに勝てるわけがないよ」

正にその通りだ。けどまだ納得できない。俺はもうすぐ死ぬんだからやれることはやっておきたいということもわかるはず。というか大体の人間は自分のことしか見えていない。こんな偉そうなことを考えている俺もだが。

けれどコハルは危険を犯してまで俺を助けにきた。コハルになら話してもいいかもしれない。

「コハル少し移動しようか。できたら宿がどこかに」

「わかったよ」

俺たちは宿に向かって歩き出した。始まりの街の一番安いところで宿を取り部屋に入る。

「それでどうしたの？」

「宿を取ったのは周りに聞こえなくするためだ」

「あーなるほど」

「それで話しないといけないのか？」

「してよ！ここまでできたんだから」

「まあそうか」

俺はメニューウインドを開き道具を出す。飲み物と食べ物だ。この一層にはこれといってまともな食べ物はまだ流通していない。

だからパンとバターを出す。コハルも知っているがおそらくまだこのクエストはクリアしていないはずだ。

「あ、ありがとう」

「まあ話すか。俺今一人暮らしなんだよ。だから俺の体は水も食べ物も入らない。持って3日ってところだからな」

「けど！家族は？家族なら助けてくれるんじゃない」

「それが一番無理だな。俺は家族と縁が切れてる状態だから」

「なんで!!？」

俺は家族のことを何も隠さず話した。隠す必要もないし隠していてもすぐに死ぬんだからもうどうでもいいかなと思ってしまった。

けれど俺はこの時知ることもなかった。現実世界でどんなことがあったのか。

ソードアートオンライン

その言葉がテレビで流れた途端に嫌な予感がした。これは確か紫雲が言っていたゲームだから。

わたしはすぐに電話をかける。今わたしだけじゃあ紫雲の部屋を開けてもらえない。

「もしもしわたし朝田詩乃と言います」

「朝田？かけてこないで!!」

やっぱりこうなることがわかっていた。けれど諦めたら紫雲が死んでしまう。絶対にでも話を通してもらわないと思いつい何度も電話をかけたが結局つながらなかった。

わたしは大家さんのところに電話をしたが話をとってくれなかった。その日はベッドに電話を持ったまま寝ていた。

なんだか家族の様子がおかしい。いやおかしいというより電話に出た時からだ。夜になっても両親はイライラしている。

「何かあったの？」

「なんでもないわ」

「朝田から電話があったんだ」

「ちよつと待って！詩乃さんから電話があつたって本当？」

「詩乃……さんだと？」

「うっさいバカ親父。何があつたのか教えて今すぐ」

「なに……を？」

「話さないとこの家でていく。それに縁も切らせてもらうから」

「な、それは……」

2人とも驚いていた。まあそれもそうだろう。あたしの名前を出汁にいろんなどころに自慢してるからそれを切られるのは痛いんだろう。ましてや自分たちのせいで切られるなんて知られなくもないはずだ。

「内容は知らん。けどかなり慌てていた」

「まさか……？？けどいやそんな」

あたしの中をよぎつたのはここ最近ニュースに出ているソードアートオンラインだ。お兄ちゃんのことだからやっている可能性は大いにある。それでかけてきたのかもしれない。

電話をかけ直そうと思ったがもう夜も遅いので明日かけ直すことにした。

ベッドに入ってから嫌な予感が消えない。まさかとは思っていたけどやっている可能性は大いにある。というかそれしかないと思う。

そのまま眠って次の日になった。

朝すぐに電話をかけて内容を聞くと正にその通りだった。あたしはすぐに教えてもらった住所に向かつていく。けれど距離があるせいで朝に出たのに着いたのは夕方になった。

「詩乃さん!!」

「沙耶香ちゃんごめんね」

「それよりお兄ちゃんは？」

「ごつち。何か証明できるものは？」
「これを」

あたしは保険証とその他にも役に立ちそうなものを持ってきた。そして詩乃さんと大家さんのところに行き部屋を開けてもらった。ベッドをみるとそこでナーヴギアに繋がれたお兄ちゃんがいた。

「お兄ちゃん」

「紫雲……」

改めて見てみるとやっぱりショックだ。けどまだ息はしているから死んではいないみたいだ。あたしはすぐに救急車を呼んで事情を話す。するとそれ専用の車が来て運んでいく。

そのまま病室に入り繋がれたまま点滴を腕に打たれていた。

「紫雲……」

「だいじょーぶですよ。あのムラクモですから。すぐに帰ってきますよ」

「なんでそんなにも強いのか？」

「強いんじゃないんです。あたしだって怖い。けどそれ以上に信じてるから」

「そう」

詩乃さんは何も言わずに帰っていった。あたしは看護師さんに無理言っでここに泊めてもらえることになった。ここにいるにはあの両親から根こそぎ奪ってやらないと厳しい。

あたしはお兄ちゃんに寄り添いながら潰す算段を考えた。あの家は金だけは山ほど持つてるから全て奪ってやる。そう考えて。

コハルと話した後俺たちは宿で休むことになった。コハルはなぜか出ていくつもりはなくて問い詰めると宿に部屋がなくてここに寝るとのことだ。俺を見張るのもあるとかいうが見張られることなんてないのに……

次の日コハルが先に目覚めておりすでに装備を整えている。

「ムラクモ最後まで諦めないで行こうよ。まだ希望はあるかもしれないから」

その声は元気がなかった。事象を知っているというのもあるがコハル自身が優しいからだろう。それで今俺に同情していてそれで何か方法がないか探しているんだと思う。

フィールドに出てレベリングをする。何においてもレベルが第一だ。レベルが高いとそれだけHPも上がるしステータスも上がる。生き残るにはいろんなスキルが必要というが何よりもレベルだ。

結局その日もレベリングしていて異常が起きたのは一旦街に帰ってきた昼だった。街に入ると異常が起きた。

「ムラクモ？」

「あ……これ？」

その言葉を最後に俺は話せることがなくなり意識がどこかに消えた。

5話

街に入っただけですぐにムラクモの意識がなくなり倒れた。そのまま引きずりベンチに寝かせると次々に倒れていく人たちがいた。この世界で病氣なんてありえないしわたしも聞いたことがない。

そんなふうに油断しているとムラクモが帰ってくるまでにわたしも意識を手放した。

意識が戻り俺の今の状況はというと目の前にコハルの顔がある。俺は寝転んでいるからなんとなく状況はわかってきたが俺今膝枕されてる状態だ。ゲームの中とは言え恥ずかしいがコハルも同様に俺と同じ現象が起こっていて手が動かしにくい。加えてこの体勢のせいで力が入りにくい。

こんなところまでリアルにしなくていいのに。

そこからコハルが目覚めるまで2時間近くかかり、その間は俺は他のプレイヤーに見られながら恥ずかしい思いをした。

「ごめんね。ついあんな状態で」

「いやいいけど、それよりなんで俺もコハルも落ちたんだ？」

「わからないよ。ただ可能性としては一度接続が切れたとかかな？」

「んん？それってもしかして」

「そうそのまさかだよ」

俺の頭の中には一つの予想がついた。まさかそんなことはないけど俺の体を病院に移送して何かしたのか？それなら納得がいく。病院に行った時間。それからそのほかの検査なんかにかかった時間なんかも合わせるとそれぐらいかかるのかもしれない。

まあどつちにしても明日になったら全てわかるからいいんだけど。俺たちはもうそれ以上レベリングする気も起きず街で装備を見て回った。それにしてもコハルのやつβでは短剣だったのに細剣に変わってるから最初はびつくりした。

「そろそろご飯行かない？」

周りを見てみるとすでにいい時間だ。俺たちは飯に行くか自分たちで買って食べるかで悩んで結局自分たちで買って食べることにした。上のほうに行くならまだしも一層ではそこまで美味しいところはないのでパンでも買ってバターをつけたほうがマシだ。

「んーおいしいね。なんでこのクエストを？」

「特に理由はないけどこの層ではバターっていうのは貴重だからな」
「まあ確かに」

俺たちは軽く食べてそこからしばらくして宿に入った。いよいよ明日になると全てがわかる。俺の体が終わっているのかそれとも誰かが助けてくれたのか。

さてあの家から金を奪い取る算段をしないとね。両親揃って弁護士をしていて事務所まで持っているから金は山ほどある。それに雇用契約もあるらしいから金の心配はしなくていいよね。

「沙耶香ちゃん？顔怖いけど」

「あ、詩乃さんきてたんですか？声変えてくださいよー」

「かけにくかったのよ。すごい顔してたから」

「あたし一回向こう戻ります。その間お兄ちゃんをお願いします」

「わかったわ。任せておいて」

あたしは部屋を出てすぐに新幹線の予約をとる。そして家に帰ったらもう夜だったのでちようどよかった。この家の奴らが全員揃うのは夜しかない。

「話あるんだけど」

「なんだ？」

「あたしも向こうに行く」

「なんだと!!？」

「そしてあたしから出す条件は3つ。向こうでのあたしとお兄ちゃんが払うお金や生活費は全部あんたらが負担すること。向こうでお兄ちゃんと一緒に暮らすことを認めること。そしてあたしを向こうに行くことを認めること」

「そんなことが通ると思ってるのかしら？」

「なら縁は切らしてもらおうことにする。あんたらは継ぐ人もいない寂しい事務所でいいんじゃない？」

2人とも苦い顔をしている。おそらく金を出すことにそこまで抵抗はないはず。悩んでる理由はあたしが向こうで済むって言ったか

らだろう。それを悩んで即決できていないはず。それに脅しとして
継ぐ人がいないっていうのも聞いている。昔からこの2人はあたし
にあの事務所を継がせようとしてきたからもしそれが途絶えるよう
なことがあるとまた話がややこしくなる。

「その条件を飲む。ただお前は事務所を継ぐことを約束しろ」

「それはまだ約束できないかなあ。だってあんたたち今ここで約束
したら契約の抜け道を探して払わない気でしょ」

「グッ！」

「あんたらが本当に約束を守ったらこっちも約束してあげる。今はま
だ無理」

そこからは紙に契約書を作り2人の名前を書かせた。その後あた
しはすぐに引越し業者を呼んで荷物をまとめて住所を言ってそこに
持っていつてもらった。

あたしの出発は夜からは少ししんどいので明日の朝にすることに
して家出の最後の日を迎えた。

3日目も同じようにしていたが体は倒れることはなかった。

「これはなんでだ？」

「よかったよムラクモ。倒れないと思ってたけど」

そこからは毎日のようにレベリングとクエストをこなしていきしばらくすると第一層のボス部屋が見つかったから攻略したいと連絡が一層中に響き渡った。

とうか知りたかったら俺が道全部教えたのに。ツールバーという街ですでに何人か来ているみたいだった。

顔を隠してる人やβで見た人なんかもいる。俺たちは端に座り会議が始まるのを待った。

会議は少しのゴタゴタと話し合いが済んで終わった。

「なあよかったら俺たちとパーティ組まないか？」

「お前は？」

「俺の名前はキリト」

「構わないよ」

「わたしも。私はコハル、こっちはムラクモ」

「ムラクモ!? ってあのムラクモか？」

「違うよ」

「そうか。てつきりあのムラクモかと思っただけで違ったか」

俺たちは3人で話しているがフードを被った女の人は一言も話さない。一応俺たちはフレンド登録を済ませてそれぞれの宿に帰っていった。

俺たちも帰る前に食事だけ済ませて宿に帰っていく。

「なんで嘘ついたの？」

「そんなに自慢することでもないしな。それじゃあまた明日」

「そっか。それならいいけど。うんまた明日ね」

俺たちは別れた。俺たちの役割は周りの取り巻きを抑えておくらしい。こんなので思うけどとりあえずクリアしないといけないことは確かなので俺たちは了承した。

この一層だけでもクリアすると死ぬ人が減る。俺たちがクリアで

きると証明できる。だからこそクリアする必要がある。

なんだか寝付けず俺は外に出て軽く体を動かすことにした。軽くモンスターを狩っていると近くで狩っている音がする。誰かと思いい見に行ってみると同じパーティのアスナだった。

「アスナか」

「あなたはたしかムラクモだったわね」

「そうだよ」

「何か用かしら？」

「いやなんでも。ただ音が聞こえたからこっちにきただけ」
「そう」

そうしてリポップしてきた敵を倒していく。元々ゲーマーなのかβなのかわからないぐらいその細剣の使い方はとても鋭く速い。攻撃力は少し足りない気もするけどそれを補うほどの速さと正確性。

「なに？」

「そう嫌悪にしないでくれよ。ただ見てるだけだから」

「そう」

「あんた早くこの世界から出て行きたいって顔だな」
「っ！」

「何か現実で焦ってることがあるとか」

すると目の前まで細剣が来たので俺はそれを上に弾いた。
すると驚いたのか顔に出ている。

「なにしてんだ？」

「あなた一体」

「ただのゲーマーだよ」

これ以上話すと本気で噛み付かれそうなので俺はその場から離れ

て街に戻った。

街に戻ると自然と眠気が来て俺は眠ることにした。

次の日の迷宮区

その日は何事もなく進んでいく。流石にここに志願しただけあつてパーティーごとで統率が取れている。

それに比べてうちは

「スイッチを知らない!?!」

「ええ」

「アスナさんそれ今までどうやってきたんですか?」

「こうやって」

言葉とは裏腹にすごいスピードで敵を倒した。キリトはともかくコハルは呆気にとられていて少し元に戻るのに時間がかかりそう。

しばらく引きずって行き俺たちは全員ボス部屋の前につきりーダー格のディアベルが一言

「勝とうぜ」

その一言に全員の士気が上がって俺たちはボス部屋に入った。こういう時って大概何かあるんだよ。誰かが空回りしてやらかすとかが。

6話

ボス部屋に入ると相変わらずでかいのがいた。それは俺が前に負けたやつでもあり、今回の標的だった。

「とつげきー」

ディアベルがそう叫ぶと全員が言葉につられるように動いていく。そこからはレイド感覚だ。俺たちが周りを押さえその間に本隊がボスを削る。だんだんHPは減っているが遅い。

見ててイライラする。こんなんで攻略組なんだから情けねー。

「おいおいすつごい顔してるけど大丈夫か？」

「まあな」

喋りながら倒していく。それにしてもキリトのやつもかなり余裕があるように見える。レベルは俺より低いぐらいだけど一撃が重そう。筋力パラに振りすぎだと思っぐぐらいに。

ボスのHPはじわじわだが減っていく。半分を切りラストまで残り少ない。

「俺が出る。他の奴らはサポートを」

そう叫ぶディアベルに対してボスが抜いた武器は刀だった。βの時とは違う。それに突進していくディアベルはおそらくそれが見えていない。

「待て！ディアベル」

俺とキリトの声は重なった。おそろく同じことを思ったんだろう。俺たちは阻止しようと飛び出したが間に合わすディアベルはもろに

くらってしまった。

「キリトディアベルを！」

「ああ」

俺はボスの攻撃を受け流しに徹するところにした。けど元々のパラメータが違いすぎて受け流してもダメージをくらう。

「わたしも」

「アスナ手伝ってくれ！」

「了解！」

コハルはディアベルの方に。アスナは俺と切り込んでいく。なんとかHPを減らして行き最後の一撃は2人で決めたがわずかに俺の方が早い判定になりL.Aは俺の手に入った。

キリトの方を見ているがディアベルは間に合わずすでに死んだみたいだ。コハルもキリトもショックを受けていて声をかけにくい。これがこの世界を抜け出す方法だとしても。

「なんでや！なんでディアベルはんが死ななあかんねん」

「は？」

「だいたいお前がボスの武器の情報を先に言ったらこんなことにはなってへんねん」

「ちよつと待ってよ」

「それにそこのやつもや！」

指を刺したのはキリトでおそらくさつき俺と同タイミングで言ったことを言われているんだろう。コハルも止めに来たがここで俺を止めるとコハルまで巻き込まれる。

「何言ってるんだトゲトゲやろう」

「なんやと!？」

「俺の名前はムラクモ。βテスターで最も高い階層まで登り数多くのゲームで一位を取ったって言えばわかるかな」

その途端いろんなどころでざわめきが起こり1人が口を開いた。

「そんなのチーターじゃないか」

「何言ってるんだ？βに当たって今まで一位になったのも周りが弱いからだよ。何をチーター呼ばわりなんだ？」

「βのチーターでビーターだ」

「あっそう。勝手に言っただけだ」

俺は階段を登ろうとしたが誰も追って来ようとはしない。コハルは今の状況に頭がつかないみたいだ。

すぐにフレンドリストからキリトとアスナに頼みごとを送った。

「コハルを頼む」

それだけ送って俺は二層に向かっていった。

ムラクモが行ってしまいわたしは何もできなかった。隣にいてもわたしはムラクモのことを何も知らないままだった。

「コハル。俺たちとパーティを組まないか？」

「キリトさん、すいませんちよつと」

「君の言いたいことはわかる。けどムラクモから頼まれてるんだ」

「ちよつと待つてください。どういふことですか？」

わたしはすぐに話を聞いた。時間的に二層に向かっていている最中に送ったんだろうと思われる時間だ。ムラクモのバカ。今やつと全部わかった。ムラクモは私やキリトさんを守ってくれたんだ。

「俺たちは二層に上がってからムラクモを探す。もちろんコハルもいてくれた方がいいんだけど」

「わたしは………ごめんなさい別で探させてください」

「そうか。また何かあったら連絡してくれ」

「ええ、いつでも連絡して頂戴」

「わかりました」

わたしはHPを回復させてからそのまま二層に向かった。ムラクモの行きそうな場所はだいたい予想がついている。わたしは迷わずその場所に足を運び行ってみるとそこに1人で遠くを見つめるムラクモがいた。

「コハル」

「ムラクモのバカ！」

「は、はあ？」

「なんであんな言い方するの!？」

「そりゃあれしか方法がないからだろ」

「わかってる！わかってるけどそれじゃあムラクモが辛いよ」

「汚れ役は1人でいいんだよ。それ以上できてしまうと怒りが分散する。だから1人に絞る必要があった」

「むう、わかってる、わかってるけど」

「ありがとな。それだけで十分だから」

ムラクモがそう言い立ち去ろうとしたらわたしは無意識のうちに手を掴んで引き留めていた。

「ムラクモがそこまで頑固ならわたしも決めた！」

「なにを？」

「わたしはムラクモとパーティを組む。それもずっと」

「は、はあ———??？」

こいついつたいなに言ってるんだ？俺とパーティを組むまでならまだいい。いや今の俺の立場的にはそれもして欲しくないけど。まだ100歩譲ってそれならいいけどずっとパーティを組む!?

「いや待て！それはダメだ」

「ダメなんて言ってもずっとついていくからね」

「お前、今の俺の状況わかっててそれを言ってるのか？」

「わかってるよ」

「ならもういいや。否定するのも疲れたし」

「それじゃあ今日からよろしくね」

「はいはい」

口ではこう言ってるけどこうなった以上コハルは守らなきゃいけない。けど隣に誰かいることに安心するのも確かなんだよな。俺はそう思ってた近くのクエストをこなしていった。

結局その日はあんまりクエストもモンスターも倒せず俺たちは街に戻る。戻るとやっぱすごい目で見られるがもう気にしてられない。

俺はボスのドロップ品を装備して装備の色を赤に変えた。宿に入り寝ようとすると俺のところに通のメッセーが来たので俺はそこに向かう。

そこは町の外れでほとんどライトもないがまだ見えないこともない。行くと3人いてある意味予想通りだった。

「やあムー坊。聞いたよすごいことしたんだってな」

「アルゴそれをいうなよ。あと用件ならさっさと済ませてくれ俺は眠い」

「ごめんね。キリトくんが君に話したいことがあるっていうから」

「いやそこまでは言っていないんだけど。それで話して？」

「悪かった。あの時擁護してやれなくて」

「なんだそのことか。別にもう気にしてないから」

「何かあったら言ってくれ。なんでも手伝うから」

「わかったよ。その時は頼む」

「あとコハルの件はごめんな。まさかすぐにそっちに行くと思ってなくて」

「いいよ。俺もくるとは思ってたけど」

みんなして笑う。ここがデスゲームと忘れるぐらいに話した。ただの友人のように。

けれどやっぱ別れると感じてしまう。ここがデスゲームの中でいつ死んでしまうかもしれないと。

そこから俺たちは攻略を進め気づくと五十九層まで進んだ。俺もコハルもトツププレイヤーと呼ばれるようになり、今キリトたちは圈内事件について調べているそうだ。俺たちも手伝うと言ったのだが今回は任せて欲しいと言われてはなんとも言えず今回は任せることにした。

俺とコハルは迷宮区のマッピングを行けるところまで行き街に戻ってきた。

「ムラクモ！あれ！」

「ん？」

見てみると空が割れていく。いやこの仮想世界に空が割れるなんて表現であってるのか？

そんなことより中から人が落ちてくるから俺はすぐに下に行き受け止めた。

「え？」

俺はその姿を見た途端言葉が出なくなった。それは俺の知っている人間にそっくりだったから。

「どうしたの？」

「い、いやなんでもない。この人のことに関して俺に任せてくれ」
「やらしいことしないよね？」
「しないわ！」

俺は落ちてきたそいつを抱いて宿に戻った。もしこいつが俺の知ってる人物なら本気で怒る。

少ししてそいつは目が覚めた。

「おい、お前の名前は？」

「フェアリーだよ」

「リアルの方だ」

「それって違反なんじゃないの？」

「いいから教えろ！」

「村田沙耶香」

聞きたくない名前が俺の耳には入った。そしてその途端怒りが沸き湧いてきて目の前のやつをどうしようか悩んだ。

「あなたは？」

「ムラクモ」

「!!じゃあまさかお兄……ちゃん？」

「ああ、なんでお前がここに」

「実はある伝手でナーヴギアを手に入れたんだ」

「おい、それどういうことだ？お前が望んできたこと？」

「うん」

そこから全ての話を聞いた。沙耶香はナーヴギアを探していてそれを見つけたからこそこっちの世界に来たこと。今現実世界での俺の体のこと。沙耶香がこっちにくる際に詩乃に全てを頼んできたこと。

「お前は街にずっと待機してろ」

「なんで!?!あたしはお兄ちゃんのために」

「ふざけるなよ。お前がくることなんて望んでなかった」

「ふざけるのはどっちよ!?!あたしの気持ちも知らないで!!」

そういい沙耶香は飛び出した。少しして追ってみるがどこにいったか全くわからない。

アルゴやキリトに連絡してなんとなく場所はわかった。そこにはコハルも向かっていて俺よりも先につきそうだ。

22 層迷いの森

俺はこの場に踏み込んだのは沙耶香のためだ。正直にいうと俺はあんまりこういうところが好きじゃない。周りはジメジメしていかにも虫が出そうなところ。

少し歩いていくと声が聞こえる。遠くだからはっきり聞こえないがそっちのほうに行くときろしいものを見た。

「離れて!?!この子はムラクモの大事な人なの」

「そーいうわけにはいかないな。と言いたいところだがここからがショータイムだ」

そいつは俺の方を見てそう言う。こいつかなりのスキル使いだ。そしてコハルと沙耶香のHPはだんだん減っていく。

マーカーを見てみるとレッドだった。

「俺の邪魔してんじやねーよ!!」

「コハル回復しろ。こいつは俺が抑える」

「う、うん」

そこからはあつという間だった。俺がそいつを退けるまでに。

そしてコハルと沙耶香は泣き俺は慰めるのに精一杯だったこと。

俺のスキルウインドに新しいスキルが発生していた。

それは高速移動技「クイツクドロウ」新しい装備方法「双剣」だった。

7話

新しい装備方法と言ってもやれることはたんけどそう変わらなかった。ただ違うのが新しく得たスキルの方だ。この「クイックドロウ」というスキル今探検で使えるスキルと併用できる。

例えばクイックドロウとアクセルパイトを合わせるとかなりの距離を一瞬で詰めれるし、移動してから体を反転すると反応できないスピードで攻撃ができる。

他にも色々やってみるけどアクセルパイトとの合わせ技が特に難しい。

スピードにまだ体がついていかないしまだまだ改良が必要だ。

俺たちはまだ攻略を続けていき異変が起きたのは60層だった。この時のLAは俺で落ちた武器も短剣だった。

武器の名前は『呪術王の短剣』だった。俺は61層に上がりそれを装備すると異変が起きた。

「ムラクモ?」

「お兄ちゃん?」

「がああああああ!なぜ私を殺した!」

そこからはどうなったか知らない。

お兄ちゃんが壊れてから1週間まだ一度も街に帰ってきていない。あたしはずっと探しているがいまだに見つからない。フレンドリストで位置情報が分かるはずなのに今は非公開になっていて場所もわからない。

「フェアリーちゃん落ち着いて」

「落ち着いて!?なに言ってるんですか?お兄ちゃんがいらないんですよ」

「今それを言ってもどうしようもないでしょ!それでフェアリーちゃんに何かあったら苦しむのは誰だと思ってるの!!」
「っ!」

言われたことになにも言い返すことは出来ずあたしは納得した。もしこれであたしが死んだらしたらお兄ちゃんは一生自分を許すことはないだろう。

だからこそあたしはいきなきやいけない。

今お兄ちゃんは攻略組の一部の人が探してくれている。キリトさんやアスナさん、風林火山の人たちにエギルさんも手伝ってくれていて情報屋のアルゴさんまでもがお兄ちゃんの捜索に手を貸してくれている。

「私たちも探しに行こっか」

「はい。それとさつきはごめんなさい。怒ってしまつて」

「ううん、気にしないで。ムラクモとフェアリーちゃんの関係は知ってるから。それで怒るのも当然だよ」

「けど」

「そんなことよりはなく探しに行こ!」

あたしたちはそこから六十一層を見て回るがどこにもいない。まだ完全にマッピングが終わってないから行ける範囲で探してみるけどやっぱり見つからない。

本当にどこにいったんだろうお兄ちゃん。

本当にバカ。こんな周りに心配かけてあたしのことなんて気にしないで。

ほんとに帰ってきたら一度怒ってやるんだから。

くそ、なんだこれ。俺の体が自分の言うことを聞かない。

むしろ勝手に動いてはいろんなものを壊していく。

脳の中に知らない奴が入ってきて目の前には骸がいた。

『我、呪術王なり』

「とりあえず俺の体から出て行けよ。邪魔だ」

「それはナラヌ。我が欲するのはツヨキ意志を持つ体ナリ」

「あとちよいちよい片言になるのやめて。聞き取りにくいから」

「かつてはこの大地をシハイしたものなり」

返事するのも疲れてきたので話を全部聞くとこの呪術王とやらはかつてこのアインクラッドを支配していたものらしい。けれどそこまで支配よくないらしく嫁と2人で暮らしていたところを恨みを持つものらしい。

「私の怒りは治らぬ。この地を滅ぼすまでは」

「待て待て待て、たしかに怒りはあったかも知らないけど滅ぼすのは

行きすぎたら」

「ダメレ！キサマなんぞに何がワカル」

「たしかにわからないけど」

「ウセロ」

俺はだんだんと周りの黒いの塗りつぶされていく。けどここで倒れるわけにはいかない。俺があいつらを守ってやらないといけないんだ。だからこそ俺はここで死ぬわけには……

「ウム、キサマがこれに抗うのか。ならば試してやろう。これを倒せるのならキサマのことを解放してやる」

「上等だ」

俺の目の前に現れたのはコハルと沙耶香だった。しかも2人とも武器を持ってこっちにくる。

「どうした？キサマにはそれが倒せないのか？」

「デメエー体どういうつもりだ!？」

「キサマの記憶から読み取ったものだ。2人ともキサマと共に行動しているのだろう。その2人にコロされるのだ」

「くうー!」

俺は腰の短剣を抜き攻撃を受け流していく。流石に本人じゃないと分かっているても攻撃できない。俺にはこの2人を傷つけることなんて……

少しすると流石に捌くのがキツくなってきて俺はダメージを負っていく。このままじゃ。

「言っておくがここでのダメージを負うとその分キサマの体に与えておく」

「なあ!？」

「それと今も変わらずいろんなところを壊しておるからの」

このやろう本当にここから出られたら殺してやる。俺は2人の攻撃を可能な限り受け流していくがダメーシはやっぱり喰らっていく。特に沙耶香はここ最近の伸びがすごくトッププレイヤーと言っても過言じゃなくなってきたている。

俺はこのまま死ぬのかもしれない。そう思っていると2人の顔が変だ。いや俺の見間違いかもしれない。けどたしかに頬に涙が……

俺のその時の行動は間違っていたのかもしれない。けれどこうする以外思いつかなくて俺は2人を抱き寄せた。背中に剣が刺さるが気にしない。

「ごめん2人にこんな辛いことやらせて」

すると2人は泣いて消えていった。

「ナゼダ？キサマはナゼ」

「なぜってあんたもそうだったんだろう。今この2人とわかった。あんたは奥さんを愛していたから自分が許せない。だからこそ自分に似た状況になったらどう取るのか見たかったんじゃないのか？」

「キサマは今までのニンゲンとは違うようだ。だからこそ試す価値がある。キサマに体を返そう。そして今の2人と合わせて指定する場所に来るがいい。それに打ち勝った時こそキサマを認める」

「わかった」

その言葉と同時に俺は体の意識が戻った。そしてフレンドリストから匿名でメールが来ていた。それはあいつからだとわかり俺はコハルとフェアリーに連絡した。

もちろん他の誰にも言わないように言って。

「お兄ちゃん!!」

「ムラクモ」

「おいおいだから俺をお兄ちゃんって呼ぶのをやめろ」

「ムウ〜」

「とりあえず2人ともきてくれてありがとう。他には誰にも言っていないな?」

「うん、言っていないけど」

「それじゃあついてきてくれ」

俺は場所に着くとそこは闘技場のような場所だった。

「なるほどそれがキサマの大事なものか」

「ああ」

「え? 誰?」

「2人ともここで試練を受けて欲しい。俺と一緒に」

「任せて!」

「もちろん。断る理由がないもん」

すると俺たちの前には60層ボスが現れた。このボスはなかなか厄介だった。呪術王の短剣を落としたこともありデバフや状態異常が多い上に攻撃力が高い。スイッチの繰り返しでなんとか倒したけどここには3人しかない。

「ではキサマの試練を始めるぞ!」

「来い!」

俺たちは3人で立ち向かっていく。最初はじわじわと削っていくのだがやっぱりそこはボスクラス。なかなか減らない。俺たちは三角形のように陣形組んで常にヘイトを散らしている。1人がダメージを負うと他の奴らでヘイトを稼ぎその間に回復するという戦法だ。これならうまくいくそう思っていたがボスのHPが半分切った頃にボスが回転しながら全員にダメージを与えてきた。こんな攻撃方法

ボスにはなかったはずだ。

コハルとフェアリーはHPが残り一割もない。ここは俺がヘイトを……

そう思ったが間に合わず攻撃の矛先は2人に向いている。

「さてキサマはどうする？キサマも攻撃を喰らうと死ぬぞ」

俺は2人の一直線上にナイフを投げクイックドロウを使う。このままだと俺がダメージを喰らうが気にしない。

「お兄ちゃんダメー！」

「ムラクモやめて」

「気にすんな。ここで死んでも」

「ここまでだ」

するとボスは消えた。だけど俺たち3人に経験値は入りかなりレベルが上がる。

「キサマの信念しかと見せてもらった」

「信念？」

「キサマは自分の命と天秤にかけてもその2人を守った。キサマには私の武器を授けよう」

「は？これがそうなんだろう？」

「それは失敗作だ」

「は？」

俺の両手には新しい武器が握らされていた。その武器の名は「精霊王の短刀」だった。担当でも短剣にカテゴリされるらしく俺は装備できた。何よりこれに付いているバフがすごい。

体力上昇、攻撃力up、HPドレイン、防御力up、素早さupなんかがついている。まだあるがこれだけでもかなりエグい。

「キサマの信念しかと通せ」

「ああ任せとけ」

「ではさらばだ」

「あんたもあの世で奥さんに会えるといいな」

「キサマはどこまでも……それでキサマの信念しかと守って見せよ」

「ありがとな」

そいつは消えていった。本当に困ったことばかりしたけど、その困った奴がこれからの俺を助けてくれる武器をくれたことは間違いない。この武器はおそらく90層クラスだ。

「ムラクモお疲れ様」

「悪かったな2人とも。危険な目に合わせて」

「ううん、大丈夫。それでどうする？街に帰る？」

「一旦帰ろうか。キリトたちにも言わないといけないし」

「そうだね」

俺たちは主街地に戻りキリトたちに連絡した。そのあと俺たちはあったことを全て話していくと全員驚きを隠せずに根掘り葉掘り聞かれたがあいつのことを話すわけにはいかないので隠しながら話せたと思う。

この後全員でパーティーをするみたいだ。

8話

パーティーが始まった今回の主催は俺だ。恐ろしい額が手元から飛んでいったが今回ばかりは仕方ない。それにまた稼げばいいし。

「それじゃあムラクモから一言」

「俺かよ！まあ今回は迷惑かけて悪かった。償いならなんでもするからなんでも言ってくれ」

「おいおいそんな言って大丈夫かあ？若干何人か目の色変わってるぞ」

「クライン、どういう………？？」

最後までいうことなく意味がわかってしまった。コハルとフェアリー、アスナまでもが目の色が変わってしまっている。

「ならわたしとは一緒に出かけてもらおうよ！」

「あたしも」

「わたしも」

「おーおー人気者は羨ましいね〜」

「うっさい！」

「グヘエ！」

クラインはなんだか腹が立ったので思いっきり殴っておいた。年上だけどころいうところでは関係ない。

今回は借りた屋敷も馬鹿でかい。人数に対して合っていないような気がする。

みんな仲良く話していたので俺は外に出て星を見る。それにしても真ん中なのに空があるってなんか変な感じだ。

「はいこれ」

「ありがとなコハル」

俺はコハルが持ってきた飲み物を受け取って壁にもたれる。

「それで何してたの？」

「いやなんとなくな。みんな楽しそうだし邪魔するのもあれだから外でも見ようかと」

「邪魔？」

「いやなんでもない。少し思い耽ってただけだよ」

「なら聞かないけどここからは覚悟しておいたほうがいいと思うよ」

「どういう？」

「さあねー」

コハルは走って戻って行く。全く騒がしい奴だ。それにしても覚悟って一体？

「なあ隣いいか？」

「キリト。構わないよ」

「今回手に入れた武器すごいらしいな」

「まあその分死ぬかと思ったけどな」

「良かった。ムラクモが死なないで」

「は？いやうんありがとう」

まさかキリトからそんなことを言われるなんて思っても見なかった。キリトとはボス戦なんかでは協力するしクエストもするけどそこまで親しいとは言えない仲だ。人なんて信用すると裏切る。だからこそ表面上だけしていたのに

「それじゃ俺は向こうに戻るよ」

「あ、ああ」

キリトは戻っていきそれと入れ替わりでアスナがやってきた。ア

スナまで何かあるのか？

「はいこれどうぞ」

「どうぞ」

アスナから渡されたのはパンだった。けれど一層の時とはそもそもがちがう。こっちは柔らかいし、モチモチ感もある。

「ムラクモくんってなんか隠してる？」

「どういう？」

「なんかわからないんだけど隠してる気がするんだよね」

「人間誰しも言いたくないこと一つや二つあるだろ」

「それもそうだね。ごめんね変なことを聞いて」

「気にしないでいいよ」

「それとコハルちゃんのごとはどう思ってるの？」

「それってどういう意味？」

「そのままだよ」

俺は聞き返す前にアスナはここから去って行ってしまった。全く意味深なことを残していくんだから世話がない。

少しして沙耶香がやってきた。

「お兄ちゃんはこの世界どう思ってるの？」

「いきなり突拍子もない質問だな」

「いいから」

「そうだな。この世界は俺は嫌いじゃない。ただそれはあくまでもゲームとしてだ。デスゲームとしては許せない」

「そっか」

「なんでそんなことを？」

「お兄ちゃんは多分誰も信用してないでしょ」

「!?!?なんでだ？」

「聞いてるうのおく」

「ああもう鬱陶しい。引つ付くな」

「いいじゃーん。ボス戦手伝ったんだから」

それを言われるとなんも言えない。俺は引つ付いているのを引きばかすのをやめて引きずって中に入っていた。するとクラインは酔いが覚めたのか寄ってくる。

「羨ましいなあーおい。なーんでムラクモやキリトばかりなんだ？」

「おいおいムラクモはともかく俺は何にもないだろ」

「アスナさんと一緒にいるじゃねーかよ」

「どういふことだ俺も何にもねえよ！」

「お前はもつとひでえよ！コハルにフェアリーちゃんまでいるんだからな」

なんでこんなに言われてるんだか。いやあれか見たことはないけど酒を飲むと2種類いるって話し。一つは飲んだらずっと無言で飲み続けてそのまま寝る奴。もう一つは寝るけど起きたらひたすら絡んでくる奴。

クラインややこしい方だったんだな。そこからクラインの絡みはすぐく俺とキリトはえらい目にあった。エギルは止めることもせずただ静観している。そのままクラインが眠るまで俺とキリトは絡まれ続けてやつと終わる頃には日が変わっていた。

「やれやれひどい目にあった」

「ふふ、そうだね。ムラクモくんもかつこいいいから」

「一体どこを見ていつてるんだよアスナ」

「ふふ、少し前も結婚申し込まれてたでしょ」

「なんで知ってんだよ。2人きりで呼ばれたから誰も知らないはずなのに」

「ふふ、アルゴさんが教えてくれたの」
「あの鼠め、余計なことを」

アルゴはこのアインクラッドでも珍しい情報屋だ。だけどその戦闘力だけでいえば攻略組にも引けを取らない。本人曰く戦闘もできないといけならしいがそんなの聞いたことがない。アインクラッドでもアルゴだけだろう。

「考えごと？」

「顔を近づけるな。男は勘違いするぞ」

「ふふ、どうなんだろうね」

「近い近い」

顔が俺との間1mもない。ほっぺ付近に来ているけど男ならこれは勘違いしてしまう。

まあ俺は興味がなからかまわないんだけど。

「ふふ、また今度こういうことしようね」

「気が向いたらな」

「楽しみにしてるからね！」

アスナは片付けに向かっていく。俺は今回の幹事だからと動かなくていいと言われたので動かないがやっぱり悪い気がしたので片付けをして宿屋に戻った。

「コンコン」

「はい」

「ごめんねこんな時間に」

入ってきたのはコハルだった。何か用があるのだろうか。そんなところで言われたのはとんでもない一言だった。

9話

コハルが俺の部屋にやってきていった一言。それは俺の想像を遥かに超えるものだった。

「わたしと結婚してくれない?」

「はい?まだ酔ってる?」

「酔ってないよ。シラフ」

「なんで急に?」

「だって今回のことでわかったんだもん。フレンドリストからでも表示できないようにできるって。だから結婚したらわかるんじゃないかと思って」

「それはそうかもしれないけどなあ、というか嫌じゃないのか?相手が俺みたいなので」

「誰でもいうわけじゃないよ。ムラクモだから言ったんだよ」

「え?なんて?」

「なんでもない!それでどっち?」

「まあ互いに利益あるならいいけど」

「利益……か。今はそれでいいや」

「うん?」

何か所々ぶつぶついつているがよく聞こえない。まあ実際結婚するといくつかいいことがあるから断る理由もない。

まあ実際にするわけじゃないし現実に戻ると関わることもないと思う。

その日コハルはそれだけ言って帰っていった。次の日コハルが朝一俺の部屋の前にいた。別に起こしても良かったんだけどまあいいと思う。

「それじゃあいこっか」

「迷宮区か?」

「違うよ〜とりあえずついてきて」

俺はコハルに言われるがままついていく。そのまま転移門で移動して着いたのは最前線の61層だ。

ここは目がチカチカする。何せ金持ちが家を買うようなところばかりだ。

歩いていくのに後ろからついて行き着いたのは綺麗な一軒家だった。

「ここは？」

「私たちの家」

「うん？今聴き違いかな？もう一回言つて」

「私たちの家」

「ちよつとマテエエエエエイ！」

「うるさいよ」

「俺たちの家!?!なんで？」

「なんでつて結婚したらこういうのに住むんじゃないの？」

「それは現実でならとか」

「こつちでも一緒だよ」

「はあ……わかったよ。それでいくらなんだ」

「それはいいの！」

「いいのじゃないだろ。コハルが今言ったじゃねーか。結婚したらこういうのに住むつて。全部出すよ」

「ダメだよ」

「ダメもクソもないんだよ。こーいうのは俺が払うから」

「でも……」

「それなら今度うまいもの作つてくれ。最近料理スキルあげてるだろ」

「なんで知ってるの？」

「さてなんででしょう」

俺は部屋から出ていった。結婚するとストレージも共通になるから楽だ。コハルの方にお金を送って俺はある場所に向かう。

迷宮区に行くつもりだったけどあるやつから連絡が来たから俺はそこに向かつていく。

ついたのは迷宮区に行く道にある洞窟だ。その奥には広げた広場がある。

そこに俺にメールを送ってきた奴がいた。

「悪いなムラクモ」

「気にすんな。それで話って?」

「こんな装備が出た」

そういう見せてきたのは片手剣を両手に装備している。俺の双剣に似ているが片手剣を両手に装備しているやつは今このアインクラッドにいない。ということはキリトのもユニークスキルか。

「それは?」

「二刀流らしい」

「じゃあ俺も隠してるもの見せないとな」

俺も双剣を装備した。キリトたち攻略組にはクイックドロウは見せているが双剣は装備しているところは見せたことがない。

キリトもびっくりしている。

「それは?」

「これもお前と同じおれのユニークスキルだよ」

「マジか」

「双剣、二刀流と似てるな」

「特訓したいんだ。手伝って欲しい」

「ああ、わかったよ」

そこから俺たちは2人で特訓を重ねた。キリトの二刀流は今からの特訓なのでスキルのカンストまではかなり時間がかかりそうだが、特におれの武器のように成長速度upがついていないから厳しいと思う。

というかこの短剣マジで付与効果がバカみたいについている上にめちやくちやいいやつばかりなんだよな。

時間は過ぎていく。そのまま結局俺たちは夕方まで特訓を続けた。キリトがこのスキルを公にしないのはおそらくおれと同じ理由だろう。

ネットゲームは大抵妬みなんかが多い。特に死ぬか生きるかの世界では。そのユニークスキルの獲得方法が分かっているなら周りに教えられるしいんだけどわかっていない場合は話が別だ。

ましてやこのアインクラッドで1人なんてことになると思いがすごい。

「そろそろ帰るか」

「そうだな。今日はありがとう」

「気にすんな。ただ誰か来ないか見張ってただけだし」

「いやそれでも助かったよ。ありがとう」

「ああじゃあな」

俺はいつもみたいに宿に戻りメッセージでえらい怒られたのは別の話。

俺たちの攻略も進みしばらくして俺とアスナはばったり会ったので話した。俺が欲しいと思っっているものに対して。

「いい武器屋さん？」

「なんかアスナなら知ってそうかなと」

「あるわよ。48層主街区にあるリズベット武具店にいつてみて」

「わかったよ。ありがとう」

俺は最前線や他で手に入れた鉱石や素材を持ってそこに向かう。

「いらっしやいませー」

「どうも。リズベット武具店ってここだよな？」

「ええそうよ。それでどうかしたのかしら？」

「あぁこのこと同じぐらいの短剣を作つて欲しい」

「ちよつと見せてもらつていいかしら？」

俺は武器をリズベットに渡した。

「ええええええええええええ。なによこれ！こんな武器見たことがない」

「どう作れそう？」

「正直ここまでの付与効果をウチで作るのは無理だわ」

「あーごめん。言葉足らずだった。付与に関しては俺も大丈夫。けど攻撃の方に振って欲しいんだよ」

「それならなんとかなるかもしれないけど素材が足りないの」

「ならこれ全部渡すからやっててくれないか？金もいくらでも出す」

「え、ええええええええええ。いや流石にこんにもらえないわよ」

「いいからいいから。それじゃあ頼んでもいいかな？」

「ええ、任せて」

「また連絡してくれ。アスナか俺でも」

「あなたアスナの知り合いだったの？」

「まあな。攻略組で一緒だし」

「わかったわ。任せて頂戴」

「それじゃあ」

俺は店から出て迷宮区に向かう。そろそろこの武器だけじゃあきつくなってきたているしそろそろ欲しいと思っていた。もちろんバレルこと覚悟だけど。

そこから数日してリズベットから連絡が来た。なんでも武器ができたらしい。

俺は鍛冶屋に向かって行き中に入る。

「来たわね。これが武器よ」

見せてくれたのは刀身から柄まで全て真っ黒の武器だった。

「名前はシャドウソードよ。とりあえず振ってみてくれる？」

俺は短剣を抜きその短剣を振る。手にしっくりくるし振りやすい。それにこの武器のパラメータを見ると本当にいいパラメータになっている。

「ありがとう。いい武器だよ」

「ええ、渾身の一作よ」

「それでいくらなんだ？」

「お金はいらないわ。ただ今度一緒にご飯でもどう？」

「かまわないけどどうしてなんだ？」

「いや、えーとなんとなくよ。これからもここに通ってもらえるようにかしらね。睡っておかないと」

「まあいいけど。りよーかい。また適当に連絡するよ」

「ええ」

俺は武器屋から出て行く。そして迷宮区で試しに使ってみるが本当に良い短剣だ。俺はボス部屋前までついた。いったん戻りマップピニングが終わったことをKOBにいいに行く。

KOBは人数こそ少ないがアインクラッドでも最強のギルドだ。中に入り話すとヒースクリフとアスナそれにフェアリーまできた。コハルまで本部にいた。

「なあなんでコハルがここに？」

「わたしと一緒に訓練してるの」

「あ、そうなんだ。まあいいんだけどさ」

「マジか」

「それで話というのはなんだね」

「迷宮区のマップピニングが終わった。ボス戦に行けるぞ」

「なるほど承知した。アスナくん、すぐさま伝達してくれたまえ」

アスナとコハル、フェアリーは出て行く。というか団長のヒースクリフがやればいいのに。前に聞いたことがある。KOBはアスナが仕切っていてヒースクリフは静観していると。

部屋には俺とヒースクリフが2人きりになった。

「あんななにもんだ？」

「何者とはどういうことかね？」

「言葉通りだよ。あんたのやり方は聞いた。それはまるでアスナたちの成長を促しているように見える」

「それはそうだろう。わたし個人できるのは限られている。ギルド全

体のレベルを上げていけないといけない」

「言ってることは理解できる。けどあなたのやり方は何かを楽しみにしているようにも見えない」

「ほう」

「まるであなたが茅場みたいだ」

「なぜそう思うのかね」

「あなたが茅場だった場合アスナたちがもう大丈夫と判断したらKOBを抜ける。そして100層で俺たちを待つとかな」

「なるほど面白い推理だ。だがそれではわたしがボス戦に参加する意味がないだろう。レベルアップを求めるなら参加しないほうがいいはずだ」

「まあ確かに。悪い変な勘ぐりして」

「なに気にすることは無い。面白い推理だった」

「それじゃあな」

「君も入らないかい。うちのギルドに」

「やめとくよ」

「そうか」

俺は部屋から出て行く。俺がヒースクリフに言った事は思っている事全てだ。だが確かにそれならボス戦なんて参加しないほうがいい。その方がこの技術の向上ができるんだから。

俺は悩みながら家に帰っていった。

10話

ヒースクリフに問いただしてからしばらくして俺たち攻略組は七十四層についた。毎度のこととは言えマツピングやそのフロアのモンスターの生態調べは疲れる。

これが誰かの役に立っているならいいんだけどこんな最前線まで来るのは攻略組が変わり者しかない。

「なにか考えごと?」

「いやなんでも」

コハルやフェアリーは基本俺とパーティを組んでいる。KOBはノルマがないためだ。俺たちはのんびり外を探索しつつレベルを上げるために借りをして行く。けれどこの辺になるとレベルが全然上がらない。

ドラ○エみたいにメタル系いたらいいのに。そんなことを考えて敵を倒して行く。

「なんかレベル上がらないね」

「まあ俺たち3人のレベルは攻略組でも1番高いから仕方ないとはいえ上がらないのはなあ」

「お兄ちゃんお腹すいた」

「今の話聞いてた?」

「聞いてたけどまた無茶しそうだったから」

グウの音もでない。俺は3日ほどこのダンジョンに潜って痛みがあるまでレベル上げをしようとしていたから。

「わかった飯でも食いに行くか」

俺たちは街に戻り何か食えるところがないか探しに行く。こちら

辺というかアインクラッド全体の料理の技術は格段に上がっている。
一層であの硬いパン食べていたのがかなり昔みたいだ。

それにここにくるまでいろいろんなことがあった。アスナが攻略の鬼
と言われたりキリトやクライン、エギルが俺の誤解を解こうと動き
回ってくれたりした。

俺は嬉しかったし事実攻略組でもちらほら、他のプレイヤーたちは
そんなことないと訴えてくれるほどになった。

俺は家に帰る途中ある人物に出会った。

「あれくもしかして村田紫雲？」

「誰だ!？」

「あたしだよ。倉田真理」

「え、ああなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなん
でなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなん
でなんでなんで」

「ふふ、やっぱりそうだ。僕は君に会えて嬉しいよ」

「なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなん
でなんでなんでなんで」

「ふふ、君はこんなにもいい家に住んでいるんだね」

「やめて！お願い」

「そんなに命令口調じゃ困るなあ」

「やめてください。お願いします」

俺は頭を下げた。

なんだか外から声がする。外に出てみるとムラクモが1人のプレイヤーに頭を下げている。

「ちよつとあなたなにしてるの!?!」

「これはずいぶんかわいい子がきたなあ」

「ムラクモ家に入っつて」

「……………」

ムラクモは家に入っつてこうとするけどそれをやめろの一言で止められてムラクモはその場に止まる。

「あなたクラマさんっつていう名前なのはわかったけどムラクモに一体なんのよう?..」

「おおームラクモ、いや紫雲も隅に置けないなあ、僕を差し置いてこんなかわいい子に手を出すなんて」

ムラクモは体を震わせてそのままそこに倒れ込んだ。むしろこの目の前にいる女の人にあっつてからはずつと体の震えを隠せていない。

「あなた一体誰?..」

「なあーんだムラクモ。こんなにかわいい子がいるのに僕のこと言っつてないんだ」

その言葉にムラクモがまた震える。むしろこのVRMMOではあり得ないぐらい恐怖が身体中から滲み出ている。

「フェアリーちゃん、あの人は一体？」

「すいません、今はそれをあたしの口からはいえないです」

「けどこんなことがあったんじや」

「とりあえずお兄ちゃんを家に入れましょう」

「そうだね」

私とフェアリーちゃんはムラクモを部屋のベッドに連れていった。一体なにがあったのか知らないけどここまでなっているムラクモを見るのは初めてだ。

それにフェアリーちゃんは今回の原因を知っていると思う。そのことに関して話してくれないのは多分だけムラクモから口止めされているんだと思う。私は何も言わずにお茶を出して口を開いてくれるのを待った。

11話

ムラクモが全く攻略をしなくなってから1週間が経とうとしていた。

その間キリトさんやアスナさんもお見舞いに来てくれたけどそれでも反応を見せない。というより部屋に籠って出てこない。

「それでムラクモの様子は？」

「さっぱりです」

「私たちがアルゴさんに頼んで調べてもらってるけどそのク라마っていうプレイヤー調べてもらってるんだけどほとんど何も出てこないの」

「どういうことですか？」

「ある程度から少しずつ話になる程度のプレイヤーだったらいいんだけどそれより前は誰にも認知されてなかったみたいなの」

「??そんなことあります？」

「本来はないだろう。だけどアルゴクラスの情報屋が言うんだから多分間違いないと思う」

確かにそれについては疑ってはいない。けれどそんなことあり得るのだろうか？ある時期から噂になるなんて。

どんなプレイヤーですら初めからこんなやつだったなんて噂はついて回る。そうログインした日から。

「そうだ！キリトさんそれって後からログインしたら話は繋がりますんか？」

「そんなまさか、いや待てよ。その可能性も捨て切れないか」

「けどそんな人いるの？」

「何も俺たちだけが知ってる人が全てじゃない。いても不思議じゃないと思う」

確かにそうだけど死ぬかもしれないこのゲームに来る人なんているのかな。

キリトさんたちは帰っていった。それと入れ替わりでフェアリーちゃんがやってきてムラクモの部屋に向かっていく。

「フェアリーちゃん教えてくれない？ムラクモのこと」

「わかりました。あたしももうこれ以上は無理です」

「ありがとう」

「お兄ちゃん、いやあたしたちの家の両親は弁護士なんです。それで弁護士と言う仕事上味方を守り利益を得るんです。それでたまたまお兄ちゃんのクラスの人が標的になった。告発されたから。その時にうちの両親は勝ちその子の家は崩壊まで追い込まれたけどそれでもなんとか家として体裁を持った」

「そこまではわかったけどなんでムラクモが？」

「そこで終わらなかった。この裁判は両親が書類の見落としで不当に責められたものだったんです。だからその娘であるあの女は憎んだ。自分の家族を潰したその家族を。そして同学年に子供がいることがわかりその子供に目をつけたんです。それがお兄ちゃん。そこからあたしも手が出せなかった。お兄ちゃんのことを知ったのは後だから」

「何があったの？」

「お兄ちゃんはクラスからいじめを受けてた。毎日毎日、それこそ普通の人なら心が折れるぐらい。毎日水をかけられて教室では居場所もなかった。それでも学校に行き続けたのは両親からの期待を裏切りたくなかったんです。だけどその両親から見捨てられてお兄ちゃんは心が折れた」

「どうして？」

「学校ではまともに勉強ができなかったお兄ちゃんは家でもしたんだけど質問や疑問に対して答えが遅くなる。だからだんだんと勉強においけなくなつた。そしてお兄ちゃんは両親から見捨てられた」

「そんな……」

「そしてお兄ちゃんはあの女を怯えた。ただの1人でここまでやった女に対して恐怖を植え付けられた。そしてお兄ちゃんは誰も信じなくなつた。信じていればみんなわかってくれると思つていたけど誰も味方をしてくれなかつたから」
「それはそうだけど」

私は話を聞いて絶句した。そんなことなんて酷すぎる。あの女の人に対してあそこまでの恐怖を植え付けられたのもわかる。

私自身聞いているだけでも恐怖を覚えている。ムラクモに対してどう接していいのかわからない。

「それでここまで聞いてお兄ちゃんにどうするつもりですか?」

「正直わからない。どう接していいのかさえも」

「やっぱりそうなりますよね。わかってます」

そういうフェアリーちゃんは部屋から出ていった。

やっぱりコハルさんでもお兄ちゃんをなんとかすることなんてできない。結局偽善なだけ。話を聞き悲しみそこからは何もしない。結局人間なんてそんなもの。

もう一度家に行くとお兄ちゃんとコハルさんはいなかった。どこにいったんだらうと思ひフレンドリストから場所を探してそこに行

くと2人はいた。

「ムラクモここも懐かしいよね。2人で一緒に食事した場所だよ。覚えてない?」

「覚えてるよ」

「ムラクモ、あなたの過去は聞いた。けど私には何もいえない」

「だろうな」

「けど一緒に立ち向かおうよ。ムラクモが倒れそうなら私が支えるから」

この人はいやコハルさんは今までの人とは違う。信じてみてもいかもしれない。あたしはそれ以上何もせずに2人を見守った。

「けど一緒に立ち向かおうよ。ムラクモが倒れそうなら私が支えるから」

その言葉は俺にとって少し人間を信じられるようになった。俺は少しだけ立ち向かう勇気が出てきた。今はまだ無理かも知らない。だけどいつか立ち向かえるといいと思っている。

「ありがとうコハル」

「ううん、気にしないで」

「それに沙耶香もな。迷惑かけて悪かった」

「え？フェアリーちゃん!？」

「なーんだ気付いてたんだ」

「まあな」

俺たちは3人で家に帰った。コハルとフェアリーが飯を作っている。その間にキリト達も呼んで俺たちはパーティを開始して全員に謝ったが誰1人としては攻めてこなかった。

「ムラクモ大丈夫か？」

「悪かったよ。迷惑かけた」

「それはいいんだけどな。まあいいか。明日から攻略を開始するのか？」

「一応そのつもりだけど前みたいにはまだやらないかな。少しずつやっていくつもりだ」

「なら私たちと一緒に行かない？」

隣からいきなりきたのはアスナだった。お前キリトのこと好きなのに俺たちとパーティを組んでいいのかな？2人きりで攻略したからパーティに誘ったんだろうに。

「いいのか？俺たちが入って？」

「構わないわよ。どうして」

「だってアスナ、キリ「わあああああ」

「なんでもないから、そういうのじゃないわ！」

「あ、そう」

「決まりね！」

俺たちは明日から同じパーティで組むことが決まりアスナとキリトは帰っていった。今日はフェアリーもここに泊まるみたいで3人で寝るとか言ってるが丁重に断ったが2人の押しが強くて同じ部屋で寝ることになった。

いざ寝る時になると2人ともすぐに寝たらしく、俺はフィールドに出た。何か違和感があると困るからだ。いざ敵に会おうとそこまで違和感がなく倒せたのですぐに部屋に戻って俺は眠って明日に備えた。

12話

ムラクモが全く攻略をしなくなってから1週間が経とうとしていた。

その間キリトさんやアスナさんもお見舞いに来てくれたけどそれでも反応を見せない。というより部屋に籠って出てこない。

「それでムラクモの様子は？」

「さっぱりです」

「私たちがアルゴさんに頼んで調べてもらってるけどそのク라마っていうプレイヤー調べてもらってるんだけどほとんど何も出てこないの」

「どういうことですか？」

「ある程度から少しずつ話になる程度のプレイヤーだったらしいんだけどそれより前は誰にも認知されてなかったみたいなの」

「??そんなことあります？」

「本来はないだろう。だけどアルゴクラスの情報屋が言うんだから多分間違いないと思う」

確かにそれについては疑ってはいない。けれどそんなことあり得るのだろうか？ある時期から噂になるなんて。

どんなプレイヤーですら初めからこんなやつだったなんて噂はついて回る。そうログインした日から。

「そうだ！キリトさんそれって後からログインしたら話は繋がりますか？」

「そんなまさか、いや待てよ。その可能性も捨て切れないか」

「けどそんな人いるの？」

「何も俺たちだけが知ってる人が全てじゃない。いても不思議じゃないと思う」

確かにそうだけど死ぬかもしれないこのゲームに来る人なんているのかな。

キリトさんたちは帰っていった。それと入れ替わりでフェアリーちゃんがやってきてムラクモの部屋に向かっていく。

「フェアリーちゃん教えてくれない？ムラクモのこと」

「わかりました。あたしももうこれ以上は無理です」

「ありがとう」

「お兄ちゃん、いやあたしたちの家の両親は弁護士なんです。それで弁護士と言う仕事上味方を守り利益を得るんです。それでたまたまお兄ちゃんのクラスの人が標的になった。告発されたから。その時にうちの両親は勝ちその子の家は崩壊まで追い込まれたけどそれでもなんとか家として体裁を持った」

「そこまではわかったけどなんでムラクモが？」

「そこで終わらなかつた。この裁判は両親が書類の見落としで不当に責められたものだったんです。だからその娘であるあの女は憎んだ。自分の家族を潰したその家族を。そして同学年に子供がいることがわかりその子供に目をつけたんです。それがお兄ちゃん。そこからあたしも手が出せなかつた。お兄ちゃんのことを知ったのは後だから」

「何があつたの？」

「お兄ちゃんはクラスからいじめを受けてた。毎日毎日、それこそ普通の人なら心が折れるぐらい。毎日水をかけられて教室では居場所もなかった。それでも学校に行き続けたのは両親からの期待を裏切りたくなかつたんです。だけどその両親から見捨てられてお兄ちゃんは心が折れた」

「どうして？」

「学校ではまともに勉強ができなかつたお兄ちゃんは家でもしたんだけど質問や疑問に対して答えが遅くなる。だからだんだんと勉強においなくなつた。そしてお兄ちゃんは両親から見捨てられた」

「そんな……」

「そしてお兄ちゃんはあの女を怯えた。ただの1人でここまでやった女に対して恐怖を植え付けられた。そしてお兄ちゃんは誰も信じなくなつた。信じていればみんなわかってくれると思つていたけど誰も味方をしてくれなかつたから」

「それはそうだけど」

私は話を聞いて絶句した。そんなことなんて酷すぎる。あの女の人に対してあそこまでの恐怖を植え付けられたのもわかる。

私自身聞いているだけでも恐怖を覚えている。ムラクモに対してどう接していいのかわからない。

「それでここまで聞いてお兄ちゃんにどうするつもりですか?」

「正直わからない。どう接していいのかさえも」

「やっぱりそうなりますよね。わかってます」

そういうフェアリーちゃんは部屋から出ていった。

やっぱりコハルさんでもお兄ちゃんをなんとかすることなんてできない。結局偽善なだけ。話を聞き悲しみそこからは何もしない。結局人間なんてそんなもの。

もう一度家に行くとお兄ちゃんとコハルさんはいなかった。どこにいったんだらうと思ひフレンドリストから場所を探してそこに行

くと2人はいた。

「ムラクモここも懐かしいよね。2人で一緒に食事した場所だよ。覚えてない?」

「覚えてるよ」

「ムラクモ、あなたの過去は聞いた。けど私には何もいえない」

「だろうな」

「けど一緒に立ち向かおうよ。ムラクモが倒れそうなら私が支えるから」

この人はいやコハルさんは今までの人とは違う。信じてみてもいかもしれない。あたしはそれ以上何もせずに2人を見守った。

「けど一緒に立ち向かおうよ。ムラクモが倒れそうなら私が支えるから」

その言葉は俺にとって少し人間を信じられるようになった。俺は少しだけでも立ち向かう勇気が出てきた。今はまだ無理かも知らない。だけどいつか立ち向かえるといいと思っている。

「ありがとうコハル」

「ううん、気にしないで」

「それに沙耶香もな。迷惑かけて悪かった」

「え？フェアリーちゃん!？」

「なーんだ気付いてたんだ」

「まあな」

俺たちは3人で家に帰った。コハルとフェアリーが飯を作っている。その間にキリト達も呼んで俺たちはパーティを開始して全員に謝ったが誰1人としては攻めてこなかった。

「ムラクモ大丈夫か？」

「悪かったよ。迷惑かけた」

「それはいいんだけどな。まあいいか。明日から攻略を開始するのか？」

「一応そのつもりだけど前みたいにはまだやらないかな。少しずつやっていくつもりだ」

「なら私たちと一緒に行かない？」

隣からいきなりきたのはアスナだった。お前キリトのこと好きなのに俺たちとパーティを組んでいいのかな？2人きりで攻略したからパーティに誘ったんだろうに。

「いいのか？俺たちが入って？」

「構わないわよ。どうして」

「だってアスナ、キリ「わあああああ」

「なんでもないから、そういうのじゃないわ！」

「あ、そう」

「決まりね！」

俺たちは明日から同じパーティで組むことが決まりアスナとキリトは帰っていった。今日はフェアリーもここに泊まるみたいで3人で寝るとか言ってるが丁重に断ったが2人の押しが強くて同じ部屋で寝ることになった。

いざ寝る時になると2人ともすぐに寝たらしく、俺はフィールドに出た。何か違和感があると困るからだ。いざ敵に会うとそこまで違和感がなく倒せたのですぐに部屋に戻って俺は眠って明日に備えた。

俺は次の日に起こることを想像だにしていなくて安心していた。

13話

74層攻略が始まる。迷宮区の攻略はトッププレイヤーの力でもかなり大変なもので1週間経っても少ししか進んでいない。そんな中攻略組に激震が走ったのだった。

攻略組最強のプレイヤーキリトとムラクモがパーティを組んだのだ。しかもKOB副団長アスナとKOBでもトップクラスのコハルとフェアリーと名乗る女の子までパーティーを組んだのだ。一部からは嫉妬目線、一部からは安堵の声も上がった。

「なんか注目されてない?」

「それだけ意外なことなんだよ。キリトと俺がパーティーを組むのは」

「そうかな。2人とも仲良いしそんなに意外なことでもないと思うけど」

そう言いながらダンジョンを進んで行く3人。今のパーティーはムラクモ、コハル、フェアリーの3人だ。

セーフティゾーンで落ち合うという話になっている。なにせアスナはキリトといただろうし、邪魔するのも悪いだろうから。

敵が出てきても俺が抑えて2人が攻撃を入れていく。今の装備は惜しみなく双剣だ。ただ一つだけ誰にも言っていないスキルがある。あれは使いすぎると頭が痛くなるから滅多にやることはないが……

そしてセーフティゾーンに着くと既にキリトとアスナはいた。2人して休憩をしているようだ。

2人の間に入るのも悪く感じたムラクモは少し離れたところでポーションを飲む。コハルもフェアリーもそれに何も言わずに従う。

2人はまだこちらに気づいていなかったがその空気をぶち破る人物が現れたのだ。

「おいおいなんでキリトもムラクモもいるんだよ。いやそれよりなん

「でお前がアスナさんとパーティー組んでんだ!？」

「これにはいろいろ訳が」

「それにムラクモも両手に花か!」

「おいおいそんなつもりはないけども」

その場に現れてそう言ったのはクラインと風林火山のメンバーだ。もともとアスナはSAO世界においては有名人だ。フェアリーもそれに劣らずの有名人だ。

そのせいもありKOBは最前線攻略ギルドとは別にSAOではアイドルのような存在である。

シリカとは違ったアイドル感。それがもう一つのKOBな顔なのだ。

しばらく進んでいくとアインクラッド解放軍と出会う。休憩していると向こうから話しかけてきたのだ。

「この先のマッピングも済ませているのか？」

「あ？人に物聞く態度じゃねえだろ」

「ムラクモ落ち着け。マッピングは済ませてるよ」

「ならそのデータを渡してもらいたい」

「お前!」構わないよ」おいキリト!

「そのデータで助かるなら構わないさ」

キリトはそのマッピングデータを渡す。それもなんの躊躇いもなく。

「あいつらそのまま突っ込むと思うか？」

「流石にそんな無茶はしないでしょ」

しばらく歩いていくと咆哮が聞こえる。まさかあいつら突っ込んでいったのかという不安がその場の全員にかける。そして走っているがそれは間に合わず扉の目の前でポリゴン片になり、砕け散った。

「嘘」

「いや、いやだよムラクモ」

「だめよ、ダメー!!」

アスナが突っ込むがそれは対したダメージにならずに振り向きダメージを受けたのはアスナだ。次の攻撃を防ぐためにコハルとフェアリーが2人でなんとかボスの受け止めるがダメージを受ける。

「キリト!」

「ああ! クライン、アスナ、コハル、フェアリー2分だけ稼いでくれ」

「三三三りようかい」

4人はスイッチの繰り返しでなんとかダメージを最小限に抑えながら時間を稼ぐ。キリトは2本の長剣を構える。しかもなんの不自然もなく。俺は精霊王の短剣を装備する。これはあまりにも目立ちすぎるから装備しなかったのだ。それに双剣に切り替える。

「いくぞキリト」

「頼むよ」

「自由に動いてくれ。合わせる」

「了解だ」

キリトは突っ込む。そしてそれに合わせるようにムラクモは《クイックドロウ》を使う。2人が合わせる攻撃は美しい演舞のようになっっていく。キリトの攻撃に完全に合わせるムラクモ。その姿に背筋の汗が止まらないアスナとコハル。一見すると2人の息があつてのように見えるだけのだが、目を合わせることもなくキリトの動きを予知に近い勘で次の攻撃に繋げる。しかもキリトの攻撃を邪魔しないように。

そしてとうとう2人の一撃はボスのHPを削り切る。いくら当

たってる数が少ないとはいえフロアボスなのだ。

2人のHPはあと一発くらったら倒れる直前だったのだ。

「キリト君!!」

「ムラクモ！」

アスナとコハルはすぐに駆け寄り抱きつく。本当に死ぬかと思っただからだ。2人ともここまで様々なことがあり、それを乗り越えてきた2人なのだ。

「おいおいこれ以上締め付けたら死ぬぞ」

「バカ」

「コハルもだよ。これ以上は動けそうに無いから」

「うん、本当に無事でよかった。ほんとうに」

「心配かけて悪かったよ」

コハルの頭を撫でるがその途中で意識が遠のいていつまたムラクモなのであった。

14話

74層攻略後の75層は攻略組をもつてしてもかなり手こずっている。クォーターポイントということもあり内容もかなり難易度が高いのだ。

「なかなかボスにつながる情報が見つからないね」

「まあ無理矢理なら見つける方法はあるんだけど」

「ダメだよ。大方自分1人でボス部屋に行つてパターンと名前を見つけてくるとかいうんでしょ」

「あはは、流石に2回目は無理か」

「それにクォーターポイントでそんなことするなんて自殺行為だよ」

「それもそうか」

ムラクモは以前に攻略手こずつた階層で同じことをしている。あの時はわたしとキリトさん、アスナで救出に向かいなんとか助かったけど今回はそんなことは言つてられない。それにあの時アスナから散々怒られたのまだ懲りて無いのかな？

そう思うと一層からムラクモといろんなことしてきたけど一番印象に残ってるのは61層かな。あの時のイベントは一筋縄じゃ行かなかつたし何よりこうして今ムラクモの隣を歩けることが嬉しい。

「なに考えてるんだ？」

「なんでもー」

そういい2人はサブクエストの攻略を着々と進めていく。そんなところにフェアリーとヒースクリフがやってきた。今までも何度かみたことがある組み合わせだが、それはボス戦などの迷宮区でのこと。普通に攻略を進めていてこの2人を見るのはムラクモにとっては初めてなのだ。

「ムラクモくん少しいかな？」

「おやそれは何かのお誘いですか？」

「もちろんだよ」

「誘うってことは何かしらのものはあるんですかね？」

「もちろんだとも。ここの料理店による来てくれたまえ」

素晴らしいメッセを送ってくる。それを確認したらかなりいい料理店なのだ。まあそんなところを奢ってくれるというのだから行くしか無いだろうと思いい返事をした。

それまでレベリングを済ませ時間ピッタリに店に着く。するとヒースクリフはすでに座っており、その隣にはフェアリーも座っていた。

俺たちは対面になるように座り、料理を頼んで来るまでにヒースクリフの話聞くことにした。

「それで話って？」

「あまり時間もないし単刀直入に言おう。君とコハルくんの2人を血盟騎士団に入ってもらいたい」

「断る」

「即答か。中々に早いな」

「だって入りたくないんですもん。俺は自由気ままにソロプレイが向いてるんですよ」

「なるほど。ならコハルくんはどうかね？」

「わたしもお断りします。ムラクモが入るならまだしも入らないなら」

「ふむ、ならデュエルで決着をつけようではないか。私としては君たち2人には入って欲しいからね」

「それ俺たちにメリットなくないですか？それなら受けないんですが」

「ふむ、もつともな意見だ。なら前払いでこれだけ払おう。ムラクモくんが勝てばこの倍を支払おう。負けたら入ってもらう。これでど

うかね?」

「乗った、やるよ」

「明日コロシムに来てくれたまえ。キリトくんとも戦うことになってる。そのあとで頼むよ」

「余裕だな。仮にもトッププレイヤー2人を相手に集中力が持つと」
「仮に負けても文句など言わないさ」

ヒースクリフは料理が来る前にその場から立ち去る。金と言いつうになったがフェアリーが持つてるそうなのでこれ以上は何も言わなかった。まあ実際払わなくてもよかったぐらいの額をもらってるから何も言わないのだが。

そして料理が運ばれてきて食べ始める。値段に恥じないぐらい美味かった。

フェアリーとはその店で別れてコハルと家に帰る。

「ふう」

「ほんとにヒースクリフさんと戦うの?ボス戦でHP半分以下になってるの見たことないって噂だよ」

「知ってる。けど……いやなんでもない」

「そこまでいうなら教えてよー」

「内緒だ」

もし可能ならあいつがシステム側の人間か、もしくは茅場そのものを確かめるのにいい機会だと思ったのも確かなのだ。

「今になって言うけどコハルは大事だよ。今までもこれからも」

「ど、どどどどうしたの?急に」

「まあまあ、だからこれからも2人でいたいと思うし、何よりコハル君が好きだよ」

「~~~~~//~~//な……んで、急に。けどわたしも大好き!」

コハルは飛びつきムラクモはそれを受け止める。なんで俺も今こんなことを言ったのかわからない。けれど言ったほうがいい気がしたのだ。

そこまで言うときコハルは自然に時間と共に眠ってしまった。

コハルが眠ったのを確認したムラクモは外に出る。明日の、いやこれからの戦いで使えるであろうあるスキルを試すためだ。自分が持っている全ての武器をオブジェクト化して無作為に投げる。前から気になっていたあるスキルを発動するとそれは予想通り発動できた。明日の対戦で使ってもいいがこれは使わないでおこうと思いき器を全てしまい家に帰って眠ったのだった。

次の日コロシウムに行くとかかなりの観客がいた。これほど集まるとは嫌なことだ。見せ物扱いなのだ。キリトが出ていき対戦するが中々の健闘を見せて負けた。それにしても最後の一撃はなんだ？異常なスピードだったが。

あれもヒースクリフの神聖剣のスキルなのか？
考えても仕方ないので次に出る。

「とりあえず体力回復してくれ」

「ほう、君にとってはこれの方がいいはずだが？」

「確かにそうかもしれないが心が拒否するんだよ。正々堂々と戦いた
いってな」

「ならば回復させてもらおう」

ヒースクリフはポーションを飲みデュエルの申請をしてくる。俺はそれを承諾して武器を構える。今回は2本ともそれなりにレア度は高いが本気の武器じゃない。もし本当にヒースクリフが茅場ならこちらの手の内を見せるのは不利だ。

だからソードスキルも使わない。双剣のソードスキルは知ってる可能性もあるがそれを使ってしまうと万が一知らなかった場合こちらから情報を与えてしまうからだ。

そして開始の合図になる。その瞬間に飛び出して攻撃を仕掛ける。それを予期していたのか巨大な盾で防がれるがさっきのキリトとの戦いでこの盾すら武器にしてしまうことがあることを知った。

適度な距離をとり、《クイツクドロウ》を使う。これの存在はすでに攻略組に知られているために使っても問題ないが連続で使えることを知ってるのはほんのひと握りだ。だからこそ一回ずつ使うことにしたのだ。

(もつと鋭く、神経を尖らせる。もつと、もつと。一挙一動に目を凝らせ)

(ほう、ここまでは。もし彼が二刀流の使い手ならどうなっていたか)

2人のこう着状態はしばらく続く。しかしそんな均衡を崩す場面を作ったのがムラクモだ。自身が持っていた片方の短剣を上に向けて投じたのだ。それとほぼ同時にヒースクリフに短剣のソードスキル《ラピッドバイト》を放つ。しかしそれはヒースクリフの巨大な盾によって防がれる。

ただこの時の異変に気づいたのはコハルだけだ。

あの投げた短剣はなんのために？ふとそう思ったがその瞬間に答えがわかる。ソードスキルを放ったはずの短剣をすぐにヒースクリフの後ろに投げたのだ。そしてさっき上に投げた短剣に《クイツクドロウ》を使い距離を取って、また《ラピッドバイト》を放った瞬間に後ろに投げた短剣に《クイツクドロウ》をしてヒースクリフに渾身の

一撃を放つ。が一瞬で動きを読まれヒースクリフもそれを迎え撃つ。そして最後に2人を分けたのは武器の長さだった。それによつてムラクモはデュエルに敗北したのだった。

しかしヒースクリフは穏やかではない顔で去っていった。終わると同時にコハルは飛び出してムラクモを引つ張っていく。本人に動く気がなかったからだ。そして別の部屋に行き

「悪い負けちまった」

「いいよ、ムラクモと一緒になら。どこまでも一緒だから」

「悪いな」

「ううん、それはさっきも聞いた。一旦家に帰ろ。連絡があるなら誰かから来ると思うし」

「そうだな」

家でゆっくりすることにした2人。今日はもう何もする気が起きないのだ。するとムラクモの方にメッセージが飛んでくる。送り主はフェアリーからだ。

内容は明日の朝血盟騎士団本部に来てくれとのことだった。

ムラクモはそのことをコハルに伝えてベットに寝転ぶ。

武装も全て解除してすぐに寝巻きになる。外はまだ明るいが本当に今日はやる気が起きないのだ。ムラクモ自身あの敗戦はショックであつて、受け入れ難いものだった。

「考えごと？」

「まあな」

「私にも話してよ。頼りにならないかもしれないけど」

「そんなことないけど、なら聞いてもらおうかな」

「うん」

「あのデュエルの結果がおかしいと思つてな」

「どこが？」

「結果自体はいいんだけど途中がな。ヒースクリフの後ろに回り込ん

だ瞬間勝ち確定してたんだ。それをあいつ後ろに即座に反応して対応までしていた。そこが引つかかるんだよ」

「まあ相手はあのヒースクリフさんだしね。何かあるんじゃない？」

「そうかもなあ〜」

これ以上コハルを巻き込むわけにはいかないと思ったムラクモは相槌を打ったフリをして会話を終えた。

15話

KOB本部に向かう2人。2人が歩くのを止めるものはいない。2人が向かうものを止めるものはいない。2人はトッププレイヤーの中でも中心に近い人物。

そんな2人が歩いていたら誰かしら声をかけるものだ。けれどその時は誰も声をかけない。気づいてはいないかもしれないがこの時の2人はとんでもないぐらい声をかけづらい雰囲気醸し出していたのだ。

そして本部に着くと出迎えてフェアリーがやってくる。その雰囲気を感じたのかそれとも別の理由かはわからないが前を歩きそれ以上は何も話さなかった。

しかし2人がこんな雰囲気なのは実際のところ怒っているのではない。ただ眠いだけなのだ。昨日2人共が考え事したり話したりして中々寝れていなかった。寝たのも集合の1時間前ほどなのだ。

「よく来てくれたね」

「負けたからな」

「そうか。とりあえずここからはフェアリーくんに聞いてくれたまえ」

それだけを言ってヒースクリフはどこかに行ってしまう。フェアリーも頭を下げてその後ムラクモとコハルについてくるように歩き出した。しかしその間一言も話さないのだ。

そして部屋に着くと二着の服が用意されていた。

「これに着替えて。それで会議室に来てもらうから」

「わかったよ」

フェアリーはそれだけ言って出ていく。2人の間に言葉はなく振

り向いて着替えた。互いが互いを見て驚く。

ムラクモにとってコハルの白服は初めて見るのだ。想像を遥かに超えてきたために思考が止まってしまった。

またコハルにとっても白服を着たムラクモを見た時にそれ以上の言葉は出てこなかったのだ。

「すっごいカッコいいよムラクモ」

「あ、ああありがとコハル。コハルもよく似合ってる」

2人はそれ以上は何も言わなかった。部屋を出てヒースクリフのところに向かう2人。そして言われたのはそれぞれの實力を確認したいとのことだ。

「コハル君は今回構わない」

「それはどういう？」

「今回見たいのはムラクモくんの實力だ」

「見せたはずですけど」

「そうではない。対処能力、状況判断能力などだ。フェアリーさんと組んでもらう。彼女には何をするかはすでに話してある」

「りょーかい」

会議室から出るとメールが来た。それはムラクモに取っても無視できない相手だった。かつてアスナから聞いたことがある相手だったのだ。

返信で終わり次第連絡すると返信するムラクモ。それを見て気にはなったがコハルは詮索しなかったのだ。

「それで今日は何をやるんだ？」

「お兄ちゃんには指揮能力を確認させてもらおうよ」

「指揮能力？」

「うん、よくわからないんだけどそれを確認してくれて団長が」

これは可能性の一部を裏付けするな。そう思い出かけるとK○Bのメンバーの一部がついてきた。

おそらく指揮を確かめると言っていたからこのメンツで試せということなんだろう。

「名前を間違える可能性があるために今日はABCで呼ぶから」

3人とも領きタンクをA、残りのアタッカーをBとCにした。

そして課題場所は迷宮区。本来であればそこまで苦戦しない。

しかし3人ともレベルがこの迷宮区に挑むまでに上がっていないのだ。

「基本的に指示を出すつもりはない。ただタンクであるAが防いで攻撃という感じだ。そしてこのレベルのモンスターを倒せるかはお前たち次第だな」

「っ！」

「2人が不安がる理由はわかってる。そのために俺やコハル、フェアリイまでついてきてるからな。臆せず行け」

「了解」

そして始まる。3人に前もって指示を出したのには意味がある。戦いという場においてはレベルは重要だ。

今回それを満たす要素であるものを3人は持っていない。しかしそれを埋めるのは俺たち3人だ。そこは心配することはないのだが戦いにおいてはもう一つの方が重要になる。

それは立ち向かう勇氣とでもいうべきものが。モンスターを敵対して敵わないレベルだからと言って戦線を離れるくらいなら前に出る。もしかすると勝てなくてもなんとかなるかもしれないから。本当に危ない時は逃げるのが重要だ。けれど戦闘が始まってすぐに逃げるのは論外だ。

「こつちは大丈夫。ムラクモ後はフェアリーちゃんの方だけど」

「あたしは手を出さないよ」

「ちよつと助けてください」

そんなふう言いながらも攻撃を捌き切っている。もしかするとこいつが一番素質があるかもしれない。

「こつちも助けてください!!」

「はいよ。後10秒後な」

「え、体力が」

「それは大丈夫」

そういうとムラクモが回復結晶を使う。するとあたりにいる奴ら体力が回復する。そして10秒経つとそいつが相手にしていたやつを一瞬で殺したのだ。

「ウソ、こんなに強いんですか?」

「団長と同じかも」

「そいつに負けたんだけど」

「まあまあ話とはかくあの子を助けてあげないと」

「そうだな」

そしてそいつが相手にしていた奴も倒す。そのままマッピングを兼ねて進んでいくと隠し扉があった。

「なにこれ!開けよ」

「?こんなところに……待て!」

「え?」

ムラクモがそう言った言葉は遅く部屋中に警戒音が鳴り響く。

モンスターハウスなのだ。その音を聞きすぐに自身がしたことを嘆き出すもの。怯え始めるもの。泣き出す奴もいた。

しかし攻略組トッププレイヤーであるムラクモ、コハル、フェアリーは慌てない。

もつともコハル、フェアリーが慌てないのはムラクモへの信頼だからだ。

「さてやってしまったものは仕方ない」

「どう切り抜ける?」

「逃げることは無理だ」

「ごめんなさい、ごめんなさい」

「謝るくらいならあそこの部屋の端にいろ。3人ともだ。フェアリー、コハルはその2人を守るようにして1人いてくれ。お前ら3人とも一応パーティ申請してるから俺たち3人のHPバーは見れるな?」

返事はなくただ頷くだけだ。

「なら俺たち3人を見てろ。誰か1人でも半分を切ったらすぐに回復結晶を使え。渡すから。まず俺とコハルが出る。フェアリーは部屋の隅で来たモンスターだけを倒してくれ。最優先はその3人だ」

「了解」

「コハル行けるか?」

「もちろんムラクモとなら安心だよ」

そこまで言うともう時間はなかった。回復結晶を渡す時間すらなくはじめはフェアリーが渡していた。コハルが守る番になったら俺とコハルはストレージが共有なので渡せるはずだ。武器を変えようと思ったが帰る時間もなくみんなに隠すように買った武器は2本装備しているだけだ。

「はあはあ何体目だ？」

「途中で数えるのやめたよ」

「同じく」

「長い。あと何体だ」

「うーん半分は終わったと思うけどまだまだいるね」

フェアリーのその言葉に考えるのを止めたムラクモ。これ以上は考えても仕方ないのだ。

「まあ俺はHP減りにくいしいけど回復薬の残りは？」

「後5本」

「7本」

「結晶は？」

「後一個です」

まずいな。結晶の残りが少ない。まず俺以外は体力がもたない。どうするべきか悩んだがこれしかなかった。

「コハル、フェアリー下がって。あいつらの前に固まって。そしてコハルあれをやるから用意を頼む」

「でも「わかった。下がろう」いやだからって」

「今からやるのは私たちは邪魔なの」

「わかりました」

コハルとフェアリーも下がる。コハルはウィンドウを操作する。

そして全ての武器をオブジェクト化してあちこちに投げて地面や壁に突き刺す。そしてムラクモは次々に《クイックドロウ》を発動して敵を倒していく。

ただ一撃とは行かずに何回も何回も行う。《クイックドロウ》は強いがその分リスクもある。

キリトの二刀流はジョブのようなものだ。それは俺の双剣然り。

しかし《クイックドロウ》はスキル。強力すぎるが故に自身への反動もある。

「まずい！今すぐ結晶を使って」

「??わかりました」

コハルの合図で結晶を使う。その判断でムラクモは死なずに済んだ。それはムラクモの持つ短剣『精霊王の短剣』を手放した途端だ。手放した瞬間にHPが急激に減った。それはこの武器の特性の一つ、ダメージ軽減だ。それがあつたから《クイックドロウ》を使えるのだ。

「よかった。タイミングが間に合つて」

「後はどうするんですか？」

「後は自然回復があるからなんとかなるはずだよ」

「それはどういう？」

「綺麗。なんだか流星みたい」

そいつが放つた言葉に全員が目を奪われる。それは次々に起こる流星のように動くムラクモの動きなのだ。

「確かに綺麗だね」

「うん」

そして最後の一匹を倒した時にムラクモは倒れ込んだ。

「疲れた〜」

「お疲れ様ムラクモ」

「しばらく動きたくないって言いたいところだけどとりあえず帰るか」

「本当にすみませんでした」

「気にすんなど言いたいが気にしろ」

「はい」

「けどこれを機に慎重になるといい。誰も死んでない。それでいいんだよ」

「わかりました。せめて何かお礼を」

そして時間を見たムラクモはなにとも言わなかった。やばいだけでムラクモは転移結晶で全員を移動させてからすぐにどこかへ消えていったのだった。